聖竜の姫巫女

ルシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖竜の姫巫女

【Ｎコード】
Ｎ６７１５Ｙ

【作者名】
ルシア

【あらすじ】
生後間もなく、＜光の女神ルシア＞を祀る神殿の前に捨てられていたミュシア。ミュシアはその後、巫女見習いとして第四の巫女リリアに仕えるようになる。そしてリリアが、ルシア神殿最高位の地位である＜姫巫女＞となったことから、次に第四の巫女の地位に就くことになったミュシア。だが、暗黒竜が聖都ルシアスの上空を舞った時、ふたりの間には哀しい別れが待っていた……。

第1章　巫女見習いの少女、ミュシア

巫女見習いの少女ミュシアは、この世に生を受けて間もなく、＜光の女神ルシア＞を祀る神殿の前に捨てられていた。

ルシアス王国は、聖五王国の中でも最古の歴史を誇る王国であり、それゆえ文化のほうも当代随一といわれるほどに栄え、そこに住む人々はもっとも洗練された人々だと、周辺諸国から考えられている。この国には古来より、「望まれぬ子」、あるいは何かの事情で「育てられぬ子」が生まれた場合、その子が女の子ならば＜光の女神ルシア＞神殿の前に、男の子であれば＜光の神ルシアス＞神殿の前に捨てておくと、哀れみ深い神が救ってくださるという言い伝えがある。

そのようなわけで、ルシアス王国の二大神殿の前には――この王国に住む住人の赤子だけでなく、周辺諸国からも神殿の前に捨てられる子が絶えなかった。そしてのちに巫女見習いとして成長した少女ミュシアも、そうした赤ん坊のうちのひとりだったのである。

ミュシアの子供時代、少女時代ともに、それはとても幸福なものだった。ルシアス王国は東西南北にある国々にとって交通の要衝となる重要な国であったから、あらゆる産物、商品が町の中を流れていくことで、豊かさと繁栄とを千年もの間享受し続けて来たのである。ゆえに、この世界の創生神話に関わる＜光の女神と聖竜＞が祀られた神殿には、参拝者が途絶えたことがない……つまり、それぞれの神殿の前にある「光の泉」と呼ばれる噴水の中には、ルシアス王国だけでなく周辺諸国のあらゆる金貨や銀貨、銅貨などが毎日大量に投げこまれていたということだ。

そのような豊かさを背景として、＜ルシア神殿＞でも＜ルシアス神殿＞でも、捨てられた子たちに対して、何不自由のない特権と待遇が与えられていたといっていい。清潔な衣服に、たっぷりとした量の一日三食の食事、それに充分な教育……ミュシアもまた、物心

ついた時からシスターたちに可愛がられ、こまやかな愛情をかけて育ててもらったものだった。

ところで、生粋のルシアス王国の人間は周辺諸国から「ルーシス人」とか「ルシス人」と呼ばれていたが、彼らは光のような金色の髪と、空のような青、あるいは海のような緑色の瞳を有した人たちであった。つまり、それ以外の髪の色や瞳の色をした人々は、他国人か混血の人間であることを意味している。そしてルシス人は＜光の神＞の子孫としての優位性を保つために、ことに純潔ということに拘る国民性を持つと言われていた。彼らにとって、他民族と婚姻を交わすことは「雑婚」として忌み嫌うべき風習なのである。

＜ルシアス神殿＞には、光の神に仕える最高位の神官がおり、＜ルシア神殿＞には「姫巫女」と呼ばれる女神官の頂点に立つ女性がそれぞれいるのだが――常にもっとも上の位に就ける人物は、身体的に見て間違いなく「ルシス人」としての特徴を持つ場合だけに限られていた。つまり、金の髪に青、もしくは緑以外の瞳を持つ者が、神殿内で最高の地位を授けられたことは今まで一度もないのである。

ミュシアは幼い頃より＜姫巫女＞に仕える巫女となるために、様々な教えや神殿内における風習を学び、十四歳の時に晴れて巫女見習いとなることが許されていた。そして＜姫巫女＞が次代の跡継ぎを決める時には、自分が選んだ十二人の巫女の中から選ぶとされている。

この＜姫巫女＞に直接仕えることが許される十二人の乙女というのは、千人の中からようやく選ばれたといってもいいくらいのもので、この十二人の巫女に仕える巫女見習いの地位に就ける少女というのも――大体、同じくらいの倍率の中から選ばれたといって過言でない。

王都の中でもっとも高い丘に隣合って立つ、＜ルシア神殿＞と＜ルシアス神殿＞にはそれぞれ、「聖契学院」と呼ばれる神官・女神官となるための付属学校があるのだが、ここは貴族の子女から、平民の息子・娘に至るまで、様々な子供たちが通ってくる場所である。

何しろ、この世が誕生した創生神話の最初に登場する女神と神を祀った神殿の学舎で学んだとあれば、のちのち良い縁に恵まれようというものだし、何より試験にさえ合格すれば、授業料のほうは国持ちで一切かからないのである。さらには、自分の娘がもし＜姫巫女＞に仕える巫女ともなれば……その家には一生の間、国から恩賞が与えられ、家族に財が絶えることはないのだ。

そのような理由から、ルシアス王国には「巫女教育」という言葉が昔から存在するほど、＜姫巫女＞というのは特異な存在であったといえる。

何しろ、ルシア神殿の女神そのものといえる姫巫女には、女王も口出し出来ぬほどの権威があったし、もし仮に（ルシアス王国の歴史上、そのようなことが起きたことは今までなかったにせよ）女王の主張と姫巫女の主張することに食い違いがあった場合……国民がどちらに味方するかといえば、それは絶対的に神の権威と威光をその身に帯びた＜姫巫女＞のほうだったのである。

ミュシアが十四歳で巫女見習いになった時、仕えることになった巫女は、リリアという名の三十五歳になろうかという女性であった。もっとも、神殿内では互いの年齢を聞きあうことはタブーとされているので、ミュシアにしても、自分の仕える巫女のリリアが、本当は一体いくつなのかを知らなかったのだが。

「ミュシア、あなた貧乏くじを引いたわね」

巫女見習い候補生たちが、光の女神を象った祭壇の前でくじを引いた時――ミュシアが引いたのは、？と数字の掘られた緑柱石であった。つまり、それは四番目の位を与えられている巫女、リリアに仕えることを許されたということを意味していた。だが、数字の書かれていないただの石を引いてしまった女学生の中には、泣きだす者もいたくらいで……そのことを思えば、自分は本当にラッキーだったとミュシアは思っていた。

それなのに貧乏くじとは、リリアさまは何をお考えなのだろうと、ミュシアは訝しく感じ、首を傾げるのみだった。

「リリアさま。貧乏くじだなどと、そのような……わたしは、お仕えできるのがお優しいリリアさまで、本当にほっとしています。親友のリルカなど、ヒヤシンス石に？と彫られた石を引いた時、さっと青ざめた顔をしていたものです。その、七番目の巫女であられるサフィさまは、少しご気性のほうが、なんていうか……」

「キツイって言いたいんでしょ。わかるわ。かといってリルカは、わたしと同じで平民の出だから……家族のことを思えば、サフィの仕打ちにも泣く泣く耐えるしかないってことよね。わたしがあなたに＜貧乏くじを引いたわね＞って言ったのは、この髪と瞳を指してのことよ」

そう言ってリリアは、化粧台の鏡に映る、自分の髪と瞳とをどこか悪戯っぽい顔をして指差していた。第四の巫女、リリアの髪は炎のように赤く、その瞳はスグリの実のような緑色をしていた。

「十二人いる巫女の中から、次の＜姫巫女＞になれる可能性のあるのは、金髪に青か緑の瞳をした女性だけでしょう？その点、サフィは非の打ちどころがないわね。あの子は貴族階級の出で、血筋のほうもしっかりしてるし、髪の毛は波打つ金の穂、瞳はそれこそ、サフィ二ア海のような青さを有しているのですもの」

サフィ二ア海というのは、西のミッテルレガント王国の向こうにある、別名中海とも呼ばれる美しい海のことである。もっとも、歌や物語の中でそう言われているのを知っているというだけで、実際にはミュシアもリリアも、サフィ二ア海の海の色など、見たことはなかったのだけれど。

「でも、わたしはやっぱり……それでも、お仕えできたのがリリアさまで良かったと思っています。確かに、自分が巫女見習いとして仕える女性が＜姫巫女＞になられた暁には――これ以上名誉に感じることはないとしても、です。やっぱりわたしはサフィさまにお仕えするよりは、リリアさまにお仕えできてよかったと、そう思ったと思いますから」

そう言ってミュシアは、鏡に向かってどこか照れくさそうに笑い

つつ、リリアのくせのある、長くうねった髪を丁寧にとかしていった。現在十二人いる巫女のうち、金色の髪に青、もしくは緑色の瞳をした巫女は、八人いる。リリアは言外に、そのうちの誰かに仕えることが出来たら良かったのにね、とそう言っていたわけだけれど、ミュシアは本心からの言葉しか、リリアに語ってはいなかった。

「それにわたしだって……黒い髪に、炭のように真っ黒な目をしてるんですもの。もし仮にわたしのお仕えする巫女がセリカさまでもラーナさまでも、その次にわたしが＜姫巫女＞になるなんてこと、絶対ありえませんし。あ、もちろんわたし、そんな大それたことを本当に考えたことがあるってわけじゃなくて……」

慌てたように真っ赤になって言い訳するミュシアを見て、リリアはくすりと笑った。そして「もういいわ」と言って、ミュシアの手から櫛を受けとると、化粧台の上に置いたのである。

「ねえ、わたしたち、ふたりきりの時はいつも、本音で話しあいましょうよ。この光の女神ルシアを祀った神殿に仕える少女の中で――自分が将来＜姫巫女＞になれたらって想像しない娘なんてひとりもいないわ。わたしもね、こんなくせっ毛の赤い髪をしてるのに、いつか＜姫巫女＞さまになりたいって、よく夢見ていたもの。でもだんだんにわかってくるのよね……そんな重責、本当に自分に担えるものだろうかっていうことが」

そう言ってリリアは、どこか寂しげに微笑した。そして神殿の前に捨てられた娘が夢見る第二のことについても、彼女は率直に言及したのだった。

「大きな声では決して言えないことだけれど、本当はみんな、心の底ではこう思っているのよね。男の人と普通に結婚して子をなす人生とは、どんなものだろうって。わたしは平民の家で育って、聖契学院へ入学が許されたのは七歳の時のことだったけど……それでも、神官見習いとか巫女見習い候補生になる前までは、休暇で家に帰ったりはするじゃない？わたしね、実はずっと好きだった人がいるのよ」

「ええっ！？」
　ミュシアは驚きのあまり、自分でもびっくりするような大声を出してしまった。十二巫女がそれぞれ住む十二の宮にはそれぞれ、第一の宮、第二の宮……と名前がついており、リリアとミュシアは現在、第四の宮にいるのだったが、それでも第三の宮と第五の宮との距離は、そう離れているわけではない。もし今が冬でなく、夏場だったとしたら――窓外の庭で誰かに聞かれている可能性というのは、なくもなかっただろう。
「今夜はもう遅いし、下仕えの女官たちもいないから、大丈夫とは思うけど」リリアは、ミュシアの驚いた顔を楽しむようにくすりと笑って続けた。「その人、ヴァイオリン工房の職人をしている人だったの。彼の働く工房の外には、小さな庭があって、よく彼の弾くヴァイオリンの音に合わせてこっそり踊ったものよ。自惚れた馬鹿な娘と思われるかもしれないけれど……彼もわたしのこと、きっとそういう対象として見ていてくれたと思うの。でもわたしが聖契学院に在籍してるのは近所でも有名な話だったし、母なんか、女神ルシアを象った像に毎晩お祈りしてるくらいだったのよ。『どうか娘が＜姫巫女＞さまになるのは無理でも、せめて巫女の位にまで上りつめますように！』ってね。そのお祈りが聞かれたのかどうか、わたしは今、第四の巫女としてここにこうしているってわけ」
　その日の夜、翌日の朝の礼拝が夜明けとともにはじまるのも構わず――ミュシアはリリアと主従関係を越えて、まるで友達同士のように色々なことを話しあった。
　本来ならば、＜巫女の間＞と呼ばれる寝所に眠っていいのは巫女ひとりだけであり、見習い巫女はすぐ隣の控えの間に眠るという慣わしなのだが、リリアは自分のベッドのすぐ隣に布団を持ってきて寝るよう、ミュシアに「命令」したのである。
「ねえ、ミュシアは時々気になるっていうことはないの？自分を生んだお父さんとお母さんはどんな人だったのかとか、そういうこと……」

ふと会話が途切れた時、リリアが小さな囁くような声で、そう聞いてきた。それは好奇心からそう聞いているというのではなく、本当に優しい心遣いからでた質問なのだということが、ミュシアにはよくわかっていた。

「今よりもっと小さかった頃には、そんなふうに思ったこともあります。わたしのように黒い髪、炭のように真っ黒な瞳をした女の子は、中海よりもっと向こうのラナーガ民族とか、北のイツファノ民族、あるいは南のロディーガ民族である可能性が高いわけですけど……結局、色々な国の血が混ざりあった混血かもしれないし、第一、自分が「どこの誰か」なんていうこと、今ではほとんど考えなくなりました。というのも、それだけ昔考え尽くしたからっていうことなんですけど、何より今の＜姫巫女＞さまであられるルシアさまが、ある時わたしにこうおっしゃってくださったんです。『自分もその昔は、神殿の前に捨てられた孤児にすぎなかった。でも今は、神さまの御託宣により、こうして＜姫巫女＞として立っているのだから――あなたも、自分が何者かなんて気にすることはおよしなさい』って。わたし、その瞬間本当にどきっとしました。もちろん、ルシアさまには未来を予知したり、人の心をお読みになる能力があるっていうのは聞いていたのですけど、あんまりずばりと自分の悩んでいることを言い当てられて……以来、本当にすっかり悩みがすっ飛んでしまったというか」

「そうね。わたしにも覚えがあるわ。何より、ルシアさまには、そうした＜言葉＞を相手にかけることによって……その＜御言葉＞自体に人を癒す力を秘めておられるのですものね。ああ、もうすっかり遅くなってしまったわ。流石にそろそろ眠らないと、早朝礼拝で巫女と巫女見習いが遅れて神殿に入っていったのでは、後輩たちに示しがつかないものね」

「ええ、そうですね」

ミュシアは布団の中から起き上がると、小さくなっている暖炉の火を消した。使った薪の量などから、夜更かししたことが下仕えの

女官にばれる可能性もあるが、第四の宮に仕える女官はサンガという名の実に朗らかな太った女で、大抵のことは見逃してくれそうでもあった。

そして、この日の夜何気なく話したことを――リリアはその後何度も繰り返し思い返したものだった。当時の＜巫女姫＞であったルシアが、自分の死を予知してのち、リリアのことを次代の巫女姫として選定した時、リリアに明かしてくれたいくつかのことに、それは大きく関係がある。

何より、リリアにとって衝撃だったのは、自分を次の＜姫巫女＞として選んだのは、リリアに仕えている巫女見習いがミュシアであったからに他ならない、と告げられたことだった。

「では……では、もしあの時ミュシアの選んだくじが、緑柱石ではなく、サフィに仕えることを示すヒヤシンス石だったとしたら、次の＜姫巫女＞は彼女だったということですか」

リリアは、病床のルシアを前にして、震え声でそう聞いた。ルシア――いや、リリアに＜光の女神ルシア＞の称号を譲った今、彼女は元の自分の名であるルルドに戻っていた。

ルルドは、それでもまだ残っている予知能力によって、リリアの行く末がどうなるのかがわかり、とても心を痛めた。そして最後にこう、次代のルシアに遺言を残したのである。

「自分の心の闇に、決して負けてはいけないよ。あの子が将来どれほどの苦しみを背負うことになるのかを思えば……今自分が背負わねばならぬ運命など、どれほどのものだろうと考えなくては。ただ、わたしはね、こう願っていたんだよ。出来ることなら自分の代に災いの星が降ってきて――次のルシアとなる娘に、つらい運命を背負わせるようなことはしたくない、とね。わたしは今年で五十七歳になる。ルシアの中には長命で百二十歳まで生きた者もいることを思えば……なんとかわたしの代でと思ったけれど、こればかりはどうにもならなかった。リリア、どうかわかっておくれ」

リリアはなんともいえぬ顔の表情で、ぎりっと下唇かんだ。彼女

は＜光の王国＞とすら呼ばれる母国が、これから他国の侵入にあい、没落する運命にあるとの預言の言葉を、ルルドから受け継いでいたのである。

リリアが握りしめていたルルドのふくよかな手は、除々に力を失っていき……＜姫巫女＞としての力の譲渡が完成した時、先代のルシアは息を引きとっていた。

そして、深い悲しみとともに＜姫巫女の宮＞からリリアが出てきた時――彼女の髪の色は炎のように赤い色から、波打つ金色へと変化していたのだった。

ずっと＜姫巫女の宮＞にある控えの間で待っていたミュシアは、この時のリリアの輝くばかりの美しさを見て、ハッと息を飲んだ。通常、＜生き神＞であるルシアの容貌を、神殿に仕える巫女以外が知ることはないが、ルシアとして在位している間中、＜姫巫女＞は美しさと若さを保ち、そして病気によって死を前にした時……初めて老いがはじまると言われている。

ミュシアはこの時、リリアの輝くばかりの美しさに打たれると同時、彼女の中に何か自分に対する別の「変化」が現われたのを、敏感に感じとっていた。最初、ミュシアはそれを、リリアが人間から生きた神になったそのせいではないかと思ったけれど――そうではなく、自分が仕える主人の瞳の中に、明確な憎しみの色を見てとると、流石に彼女もショックを隠せなかった。

ミュシアはこの頃には十六歳になっていたが、もちろん自分が仕える巫女が晴れて＜姫巫女＞となり、これ以上の喜びと栄誉は他にないと思っていた。親友のリルカがこっそり、巫女のサフィさまがいかに我儘な方かと愚痴をこぼすのを聞くたびに……リリアさまに対する愛情がかつては増したものだったというのに、一体これはどうしたことだろうと、ミュシアはその理由が知りたかった。

リリアがルルドの後を継いで＜光の女神ルシア＞に仕える姫巫女となり、第四の宮が空室となった時、当然、次の第四の巫女を決めるため、巫女見習いの娘の中から二十四名がルシアの像を象った神

殿の前へ呼ばれた。
その中にはミュシアもいたし、彼女の親友のリルカの姿もあれば、第五の巫女セリカに仕える巫女見習い、シェイラの姿もあり、また第八の巫女ラーナに仕える巫女見習い、ミルカの姿などもあった。
この中で誰もが心の中でこう祈っていた――（自分こそが、晴れて第四の宮に務める巫女となれますように！）と。特に、リルカの願いは切実なもので、彼女はとにかく意地悪な第七の巫女、サフィから解放されたくてならなかったのである。シェイラとミルカは貧民の出で、そこから苦労してここまでの身分を得ていただけに、一度巫女になってしまえば二度と家には戻れぬとわかっていながら、それでも第四の巫女になるという地位が喉から手が出るほどに欲しくてたまらなかった。
だが、この時もまた＜？＞と彫られた緑柱石を引いたのは、他でもないミュシアだったのである！
その緑色に輝く石を自分の手中にした時、誰より驚いたのは、ミュシア本人だったといっていい。そして（まさか自分が本当に……）というように、彼女が周囲を見回した時、そこにあったのは、嫉妬と羨望の入り混じったような、深い疑いの眼差しだったのである。
うえ～ん！と思わずリルカが泣きはじめると、シェイラやミルカが、すぐにリルカを慰めるために、彼女の元まで走っていった。ミュシアも出来ることなら、姉妹も同然のようにして育った友を慰めるため、彼女の元まで走っていきたかった。けれど、第四の巫女として選ばれてしまった以上――そんなことはしても意味のないことだと、肩を落としただけだった。
この日以降、ミュシアは周囲の人々に「何かいかさまをしたのではないか」という疑惑の目で見られ、神殿内で非常な孤立感を味わうことになった。自分に付いている巫女見習いの娘も、どこか軽蔑したような冷たい態度で接してくるし、ミュシアはこの時生まれて初めて、神殿の外へ出て自由な人生を送ってみたいと、強い憧れを抱くようになったのである。

もっとも、ミュシアなりに、これまで優しく接してくれた人までが何故、急にころりと態度を変えたのか……わからないではなかった。まず、自分が巫女見習いとして仕えていたリリアさまが晴れて＜巫女姫＞となったこと、さらにその空席を埋める形で、自分が？という数字の彫られた緑柱石を引いてしまったこと。こうしたことは、「あまりに出来すぎ」という印象を人の心に与えてしまっただろうからだ。

それともうひとつ、口に出してはっきりとは言えないまでも、人々が何故自分が「巫女に相応しくない」と思うのか、その理由についてもミュシアは理解しているつもりだった。

（このカラスの羽のように黒い髪と、深い闇を溶かしこんだような黒い瞳……）

リリアが先代のルシアから次代のルシアとして指名された時も、人々の間にはざわめきが走ったが、それでもリリアの場合――母親も父親もずっと長く王都で暮らし続けている人たちであり、家系図のほうもかなりはっきりしていたから、どうということもなかったのだろう。だが自分の場合、リリアの時のようにこの黒い髪が黄金色に輝くなどありえないし、瞳の色だって同様だろう。何より、自分の容貌があまり美しくなく、巫女としてパッとしないどころか恥であるようにさえ感じられること、それが問題なのだろうと、ミュシアにはわかっていた。

（自分のせいではないことで苦しまねばならぬこと、それこそが至高の苦しみである……）

この世界が作られた時の創世神話にはじまり、歴代のルシアス王国屈指の詩人や預言者たちが書き記したという聖なる書に目を通しながら、そこに今の自分に対する慰めの言葉を見つけて、ミュシアは静かな宮の中で寂しげに微笑んだ。

今の彼女にとってもっともつらかったのが、リリア、いや、今では＜光の女神ルシア＞と同一視される姫巫女が、自分の孤独感や孤立感といったものを見てわかっているはずなのに――あえてそれを

まるでないもののように無視したことだったろうか。
姫巫女を前にして、光の女神ルシアを讃えるための賛美歌を歌い、彼女を喜ばせるための＜光の舞＞が演じられる間中、神殿の玉座に座っている彼女は、自分のほうへ決して一瞥もくれようとはしなかった。
（わたしは一体、リリアさま……いえ、姫巫女さまに何を期待していたのだろう？『あなたの今のつらい気持ち、よくわかるわ。誤解が解けるように、わたしのほうからみんなに一言話してみるわね』とでも、以前のように優しくお声がけして欲しかったのだろうか？）
それからもうひとつ、ミュシアには＜姫巫女＞に対して期待していたことがあった。＜？＞と刻まれた緑柱石を引いた時、実はミュシア自身が誰よりもショックを受けていたのだ。何故といって、晴れて＜姫巫女＞の地位に就いたリリアに、これからもお側近くで仕えていけるのだと誇らしく思っていたミュシアにとっては、今の第四の巫女の地位など、有難いものでもなんでもなかったからである。
（リリアさまは姫巫女になられてから、変わってしまわれた……本当は、あなたが第四の巫女に選ばれてしまうなんて、これからは自分のそばにいてくれないだなんて寂しいと、わたしはリリアさまに、せめて最後にそう言って欲しかったのかもしれない。それなのに……）
そこまで思ってからミュシアは、自分のあまりに人間的すぎる考えに、慌てて首を振った。
（もう、リリアさまは人ではない。人であると同時に、神でもあられる方なのだ。それなのに、そんなふうに人間的な範疇に留めるようなものの考え方をするなんて、冒？というものだわ）
けれど、やはり迷いの手が額を掠めるように、ある不安な気持ちがミュシアの中からは去っていかなかった。
（リリアさまのあの、憎しみをこめて汚らしいものでも見るような眼差し……いえ、穢れたものを見たくないからこそ、こちらに視線を与えたくないとでもいったような態度。リリアさまがもし、わた

しに対して以前と同じく優しい態度で接してくださったら、まわりの人たちも少しは考えを変えてくれるかもしれないのに……）

――誰が十二人の巫女として真に相応しいかということは、神意を窺うためのくじによって決められるということは、神殿内にいる者なら、誰もが知っていることだった。このくじは女神官の手によって厳重に保管・管理されているものなので、何か細工するなど不可能に近いということも、誰もが知っているはずだった。

（それなのに、どうしてわたしばかりがこんな思いをしなくてはいけないのかしら？）

周囲の人間の、冷たい軽蔑するような眼差しに囲まれ、ミュシアはそれから数か月もの間、つらい思いを抱えて過ごすことになった。第四の巫女となってしまった以上、いくら親友とはいえ他の巫女付きであるリルカと話す機会もほとんどなく……ただ毎日、決められた聖なる行を執り行い、時間だけが手の間からすべり落ちる砂のように過ぎていった。

そしてその寂しく孤独なつらい日々の間、ミュシアは第四の宮から見える庭の景色を眺めては、夢想に耽ることを喜びとした。七歳となり、聖契学院にて神との契約――この生涯を神に捧げます、との――を正式に結ぶまでは、ルシア神殿の前に捨てられた子も、ルシアス神殿の前に捨てられた子も、同じ学舎で学んで過ごすことになっている。そこでミュシアは、ルークという名の自分と同い歳の子ととても仲が良かった。今、ミュシアは庭に白いデイジーの花が咲いているのを見て、彼がそれで花冠を作り、自分の頭上に被せてくれた日のことを、ついきのうのことであるかのように思いだしていた。

『おお、我が姫巫女、ルシアよ。御身に我が身を捧げ奉ります！』

そう言って膝をついてミュシアに向かって一礼し、それからルークは彼女の手の甲に口接けた。

ルシアス王国に古来より伝わる＜聖竜伝説＞によれば――この世の始まりの時、そこには神と大いなる闇しか存在しなかったという。

そこで神が「光あれ！」と言った時に、光の女神ルシアが誕生した。ルシアは神の命を受け、世界をくまなく光で満たそうとしたが、大いなる闇は彼女の存在を滅ぼそうとした。だが、大いなる闇の化身である暗黒竜が現われた時、ルシアを守るために神が光の竜ルシアスを誕生させ、暗黒竜を退ける盾とならせたのだ。

ルシアス王国の祖は、この聖竜ルシアスの末裔と言われており、ゆえにルシアス神殿に仕える神官たちは、有事の際には死力を尽くして姫巫女の座しておられるルシア神殿を守るため、日々精進に励んでいるのであった。

聖契学院へ入学したその日、仮誓願を立てる生徒と本誓願を立てる生徒とにまずは分かれることになるのだが、ミュシアもルークも互いに、本誓願を立てる組に自ら希望して入っていた。仮誓願というのは、学院を卒業するまでは「生涯を神に捧げるかどうか」考える猶予の与えられるコースで、もしその後実家の商家を継ぐといった事情が生じた場合、仮誓願を取り消せば還俗することが許されている。

けれども、本誓願を立てたが最後、それは二度と世俗の世界へは戻れぬということを意味していた。過去に、貴族から見初められて本誓願を立てていた女神官や巫女見習いが神殿を抜けだし駆け落ちした……といった事件は何度かあったらしいが、その後、どんな理由があってもその女官はルシア神殿へ足を踏み入れてはならぬという厳しい掟があった。

ミュシアは、第四の宮と第五の宮を繋ぐ渡り廊下のところから――遠い空を白い鷲が弧を描くように飛んでいくのを見、＜外の世界＞へ自由に飛び立とうとする自分の心を、不意に戒めた。

年に三度ほどのことだが、ルシアス神殿へ＜姫巫女＞と彼女に従う十二人の巫女たちが、神官たちに華麗な棒術演武を披露してもらう機会がある。ミュシアは第四の巫女リリア付きの巫女見習いとして、その様子を何度か見たことがあったけれど……彼らの一糸乱れずに動くさまは、それは見事なものだった。それだけではなく、名

うての師範たちが腕を競いあう姿も、まるで何かの舞のようで――そのあと、自分たちが彼らの前で＜光の舞＞を舞わねばならぬ、その手順のことなど、ミュシアは一瞬頭から消し飛んでしまったほどだった。

その時、ルークが師範代として、年長の師範と棒術を競いあっている姿を見た時ほど、ミュシアの心が高鳴ったことはなかったかもしれない。

ルシアス神殿では、神に仕える神官は全員が肩のところで髪を切り揃えるといったスタイルであり、全員が同じ髪型、まったく同じ衣服を着用していているので、ちょっと見には見分けなどつかないのだけれど――ミュシアはルークのことだけは、一目見ただけで彼であるということが、すぐわかっていたのである。

そしてミュシアは、自分が十二人の巫女たちの後ろで舞を披露する間……ルークがこちらを見ている眼差しを、熱いほどに感じていたのだった。

そう、彼が日々精進に励んでいるように、自分もまた巫女としての重要な務めを果たさなくてはならないとの思いを新たにし、その日の夕方、自分付きの巫女見習いサリナと一緒に、ミュシアはルシア神殿の本殿へと香を焚くために上っていった。

ルシアス歴と呼ばれる暦によれば、一年は十三か月に分かれており、ミュシアがその夕方本殿へ香を焚くために向かったのは、六月の十三日、麦刈り祭りの前日のことであった。この日から七週にわたって収穫を祝う祭りが続き、小麦の中でも最上のものがまずルシア神殿・ルシアス神殿それぞれに奉納されることになっている。

毎年行われるそのための神聖な儀式があり、ミュシアは本殿でひとり香を盛って焚きながら、今年も豊作であることを神に対して心をこめて祈っていたのであった。

総大理石によって作られた、この本殿のもっとも奥まった場所には＜姫巫女＞のみが入ることを許されている祈り場がある。そして

第四の巫女であるミュシアや他の十一人の巫女たちが立ち入りを許されているのは、有翼人身の像が二体、互いに羽を差し交わしているその扉の前までだった。

そこには、十二枝に分かれた蝋燭が純金製の燭台に掲げられ、その下に香を盛るための壇があった。この香は絶やしてはならぬと決められているものであり、ミュシアは火皿に炭火を盛ると、さらにその上に香をのせて神の前に捧げ続けた。

巫女見習いのサリナは、ここよりさらに手前にある脇部屋で一晩中待機していなければならないのだが、彼女が時々居眠りしているらしいことを、ミュシアはよく知っている……また、この香は聖契学院に入った生徒たちが、作り方を教えてもらう最初のものだった。

匂い菖蒲や肉桂などをうまく配合してかおり高い香とするのだが、自分の作った香がいずれ巫女さまたちの手によって神の御前で使われると思っただけで、興奮に胸がわくわくしたのを、ミュシアは今もよく覚えている。

神殿内で使われるものはそのようにしてすべて、誰かが思いをこめ、聖なる気持ちをこめて形作ったものばかりが使われているのだ。ミュシアはそのことを思い、いつものように神聖な気持ちを呼び起こされる気がしていたが、寝ずの番をして第四の宮へ戻ろうとした翌朝のこと――もっとも高い場所に立つ本殿を出た瞬間、我が目を疑うものを目撃していた。

それはサリナも同様だったようで、彼女は陽射しに当たると、最初眠そうに目をこすっていたのだが、突然目が覚めたというように、大空を指差して叫んだ。

「ミュ、ミュシアさま！！あ、あれ、あれ、あれは……わたしが夢を見ているのでなければ、ド、ドドド、ドラゴン……！！！」

サリナは、赤い背びれを持つ体長五メートルほどもある黒き竜がこちらへやって来るのを見て――即座に坂道を転げ落ちるようにして逃げていった。

ミュシアもまた、ドラゴンを見るのはこれが生まれて初めてだっ

た。これまで、まさかドラゴンが本当に生きて存在する生物だとは、今の今まで思ってみたこともなかったのである。
ヒュッ、とすぐ自分の脇を翼を掠めて飛んでいったドラゴンと、ミュシアは不意に視線と視線が出会った。バサッと翼が一動きしただけで、ミュシアはその場に立っていられなくなるほどだった。草や花と一緒に風が舞い狂い、一瞬息が出来なくなるほどの風圧だった。
『（おまえが、聖竜の姫巫女か……）』
心の中に直接問いかけられ、ミュシアは驚愕した。
一対の紫色の瞳がじっと自分を見下ろし、嘘をついてもわかるのだぞ、というようにこちらを威嚇している。
「わ、わたしは聖竜の姫巫女などではない。だが、あの方は我らが命を懸けて守らなくてはならないお方。禍き竜よ、何用かはわからぬが、今すぐここから立ち去れ！！さもなくば……」
『（さもなくば、なんだというのだ？わたしを禍き竜などと言う、愚かな人間よ。なんにしても、おまえからは＜鍵＞の匂いがしない……どうやら、わたしの間違いだったようだ）』
そう言って、どこか禍々しい感じのする竜は、もう一度大空へと飛び去っていった。
「鍵？鍵ですって……？」
あの竜はなんのことを言っているのだろう。ミュシアは、竜が一度は飛び去り、そして旋回してこちらへ戻ってくるのを見て――姫巫女が寝所としておられる宮にまで、一目散に駆けていった。
あの猛々しそうに見える竜には、実は人間以上に賢い知恵があるのだと、ミュシアにはわかっていた。一晩中寝てもいないというのに、すっかり眠気も吹き飛び……神殿内は走ってはならぬという幼き頃より叩きこまれた掟のことさえ忘れ、女神官たちが慌てふためく中を、姫巫女さまのおられる宮へとミュシアは急いだ。
「ああ、良かった！！ミュシア、あなた無事だったのね」
第九の宮から第八の宮へと至る渡り廊下のところで――ミュシア

は不意に探していた<姫巫女>その人から話しかけられ、思わず涙が滲みそうになった。その時のルシアからは以前まで感じていたようなよそよそしさが払拭されており、髪こそ金色であったが、彼女はミュシアがよく見知っているリリアそのものだったからだ。
「寝所からあなたが竜に襲われそうになっているのを見て……わたしたち、本当に心臓が止まりそうになったわ。どこにも怪我はないのでしょうね？」
「はい。それよりも、あの竜が気になることを申していて……」
いつもは結い上げている髪が、床にまで垂れているところを見ると、ルシアさまはまだ起きたばかりなのだろうとミュシアは思った。そして深く頭を垂れ、ご尊顔を汚さぬよう、ミュシアが平伏した姿勢のままで続きを話そうとした時――奥庭のほうで「キャアアアーーーッ！！！」という娘たちの叫び声が続いた。
先ほどの竜が奥庭へ着地すると同時、そこにあった大理石の噴水を足の鉤爪によって粉砕し、水の中へ飛び込む姿が見えた。
「ミュシア、こっちへいらっしゃい」
ミュシアが驚いたことには、これほどのことが起きているというのに、ルシアは平静そのものといった顔をしていた。
（そうか。ルシアさまには未来を予知される能力がおありになるから……もしかしたら、今日この日のことも、前もってわかっておられた……？）
ルシアに手を引かれ、神殿内を走っていくうちに、ルシアが本殿へと向かっていることがミュシアにはわかった。自分がこちらへ向かおうとしなくても、ルシアさまは本殿のほうへ来られるつもりだったのだということがわかり、ミュシアは涙がこみ上げそうになった。
（この人を守るためなら……わたしは今日、あの恐ろしい竜の鉤爪と牙の餌食になって、死んだとしても構わない）
「おまえたち、もうここまでいいわ。それぞれ、自分の実家でもどこでも、好きなところへお逃げなさい」

ルシアとミュシアの後についてきていた、何人かの巫女や巫女見習いたち――第一の神殿、瑪瑙の宮に住む巫女レイアも、第二の神殿、琥珀の宮に住むディアナも、第七の神殿、ヒヤシンス宮に住むサフィも、互いに顔を見合わせて怖じ惑った。

「わたしのことなら、心配しなくても大丈夫よ。それより、わたしはミュシアとだけ、大切な話があるの」

この時、言葉によってではなかったが、一種独特の空気が本殿の門前に流れるのを、ミュシアは感じとっていた。レイアもディアナも、内心でミュシアのことを疑っていたのを、今この段になって恥じているということがミュシアにはわかったのだ。

唯一、サフィだけは「姫巫女さまをお守りするという手柄を、第四の巫女に横取りされたくない」といったような顔をしていたけれど……その彼女の後ろで、リルカがこれまでにあったことをあやまりたいような表情をしているのがわかって、ミュシアはリルカに向かって微笑んだ。

『（いいのよ。わたしとあんたの仲じゃないの）』

ミュシアがそう心の中で呟く声が、おそらく親友には聞こえたのだろう。途端、リルカの顔が輝くのがわかって、ミュシアは国の大事というこの時にも、心の底に喜びが満ちてくるのを感じていた。

「そうね。もちろんついてきてもいいけれど……でも、聖所の脇部屋のところで待っていてちょうだい。今日は、そこより先へ踏み入ることは、このわたし、＜姫巫女＞ルシアが決して許しません」

聖所の前ではミュシアと交替で香の番をしていた第五の巫女セリカが、どこか落ち着かなげな様子で、こちらを振り返っていた。

「ルシアさま……！！」

周囲のただごとでない気配を感じとったものの、ここから動くわけにもいかないと思ったのだろう、セリカが泣きそうな顔をしながらルシアの足許へと飛んでいった。

「ほら、そんなに泣いたりしないの。あなたの付きの巫女見習いのシェイラなんて、肝が据わってて大したものよ？死んでもあなたの

ことを守るって、脇部屋のところで誓ってたくらいなんだから」
ルシアは、子供に噛んで言い含めるように、セリカのことを落ち着かせると――彼女にもまた、どこでも好きなところへ避難していいという言葉がけをした。
「どうして……どうしてですか、ルシアさま！？わたしたちは、御身をお守りするためにこそ、今までこうして……」
むしろ、ルシアの常ならぬ物言いに不審さを感じとったのだろう。セリカがますます泣き声を高めると、空気を察したらしい巫女見習いのシェイラが、セリカの身を引き受けて、脇部屋のほうへ戻っていった。
「さあ、ミュシア。これでようやく、あなたとふたりきりになれたわね」
そう言うとルシアは、有翼人身の二対の像が翼を差し交わしている真下まで来て、ミュシアのことを手招きした。
「いつか、こんな日が来るということは、ルルドさまからもお聞きしていたこと。わたしの次の＜姫巫女＞は……ミュシア、あなたがなるのよ」
「リリアさま、一体何をおっしゃるのですか！？」
あまりに大きな声を出しては、脇部屋にいる巫女たちに聞かれてしまうかもしれない。ルシアはさらに声を低めて、こんなことを話しはじめた。
「つまりね、あなたが次の＜姫巫女＞になるということは、わたしが＜姫巫女＞になるのと同時に、ほぼ決まっていたようなことだったの。だから、あなたは次の代の＜姫巫女＞として、この扉の向こう側へ足を踏み入れる権利があるってことよ」
「そんな……もしそれが仮に本当のことだったとしても、今のわたしはまだ、ただの第四の巫女です。そんな何百年もかけて守られてきた掟を破るような真似……」
絶対できません、と言いかけて、ミュシアは言葉が継げなくなった。

ルシアの緑色の深い瞳には、悲壮な絶望の色が浮かんでいたからだ。その瞬間、ミュシアは悟った。あのドラゴンは＜姫巫女＞さまを探しており、彼女はこれからおそらく――死ぬ覚悟で、何かを成し遂げなければならないのだと。

「とにかく、もう時間がないわ」

事情のすべては飲み込めないにせよ、ミュシアはルシアに対して言い抗うのをやめることにした。

ただ、＜光の神ルシア＞その人でもある彼女に、黙って従うことにしようと決めたのである。

代々の姫巫女だけが入ることの許される祈り場は、意外にも物がほとんど何もなかった。ただ目の前に、大理石で出来た＜光の神ルシア＞が月桂樹を頭に戴いた壁画が描かれているという、それだけの場所。

「わたしもミュシアと同じ第四の巫女だった頃、聖所で香を焚きながら、いつも思ったものだったわ。ケルヴィムのいる向こう側の扉の中はどうなっているのだろう、そこで＜姫巫女＞さまはどんなお祈りを捧げられるのだろう……ってね。実際は見てのとおりよ。人間が期待するほどのものなんて、何もない」

ミュシアは、光の女神と同一視されるほどの方が、どこか投げやりな口調でそう語るのを聞いて、胸が苦しくなった。それで、震える手で自分の不安な胸の鼓動を押さえながら、こう申し上げたのだった。

「お、怖れながら姫巫女さま。何もない、ということは決してありません。ここには聖なる気といいますか、そうした目に見えぬ人を畏怖させるものが満ち満ちていると思います」

「そうね。あなたの言うとおりかもしれないわ、ミュシア。でもわたし、最後にどうしても、あなたに懺悔しなくちゃならないの。他でもない、生きた神とさえ言われるこのわたしが……ただの人間のあなたにね。わたし、＜姫巫女＞になってからずっと苦しかった。なんでこんなものに選ばれてしまったんだろうって、心の中で随分

ルルドさまをお恨みしたものよ。しかも、ルルドさまは――あなたが巫女見習いとして＜？＞の緑柱石を引いたから、わたしを次の＜姫巫女＞として選んだだなんておっしゃるんですもの。もしミュシア、あなたが瑪瑙か琥珀の石に＜？＞か＜？＞って刻まれたものを引いていたら、今ごろわたしはこんな重責を担うこともなかったのだと思うと……わたしの心には、憎しみという名の影が、生まれて初めて心の中に差したほどだったのよ」

（ああ、それで……！！）

ルシアの語る言葉のすべては理解できないながらも、断片的にミュシアは彼女の言いたいことが理解できる気がした。あの、どこか自分のことを冷たく軽蔑するような眼差しは、そのことに起因していたのだと……。

「もちろん、ルルドさまもおっしゃっていたとおり、聖なるお伺いを立てるくじは、古来より伝わる神聖なもの。つまり、神の前に＜偶然＞はありえぬということですものね。ゆえに、わたしは短いながらも確かに神から選ばれて、今こうして＜姫巫女＞になっているというわけ」

ルシアは両手を広げると、突然ミュシアに抱きついて来、彼女の腰をぎゅっと自分のほうへと引き寄せた。

「＜姫巫女＞さま、一体何を……！？」

「大丈夫、すぐに済むわ。わたしの体の中にあるものをあなたの中へ移し終えたら、わたしの＜姫巫女＞としての役目は終わる。あの黒い竜はね、たぶんこの＜鍵＞を探しているのよ。ルシア神殿に代々伝わる＜ルシアスの鍵＞。わたしはルルドさまの体内からこれを受けとり、そして必ずミュシア、あなたにこれを継承させると、ルルドさまとお約束していたの。ああ、本当に苦しい五か月間だったわ。鍵を常に体内に持つ＜姫巫女＞は、己の魂の暗部と対峙していなくてはならない……これは聖なる鍵などではなく、邪悪な何かなんじゃないかと疑うことも、しばしばあったくらいよ。わたしはこの五か月、ルルドさまを恨み、ミュシア、あなたのことも恨み、自

分の運命も恨んだわ。聖契学院へ入るよう仕向けた母のことも、わたしが巫女になるよう祈り続けた家族のことですらね……でも、今はもうただ、あなたに対する懺悔の気持ちしか残ってないわ。この五か月の間、あなたがどれほどの孤立感の中で苦しみ悩んでいたか、わたしにはよくわかっていた。それなのに、自分もこれほど悩み苦しんでいるのだから、あなたも少しは苦しめばいい……わたしはそんなふうにしか思えない人間だったの。そう、生きた神なんかじゃなく、わたしは本当にただの人間だった。でもあなたはきっと――わたしよりも大きなことを成し遂げられる。だから、これからどんなにつらくても、どんなことが起こっても、どんなことを聞いたとしても、決して諦めないで。＜聖竜の鍵＞がともにある限り、必ず道は開けるということを、信じるのよ」

「リリアさま……っ！！」

自分の体内に＜ルシアスの鍵＞を受け止めたからではなく、ミュシアは感極まるあまり、彼女のことをルシアではなくリリアさまと、無意識のうちにそう呼んでいた。

もちろん、まだリリアに聞きたいことはミュシアにはたくさんあった。そして今ここで聞いておかなければ、二度と再びそう出来る機会はないであろうことも……ミュシアには本当はわかっていたのだ。

「＜光の女神、ルシアにお願い申し上げる。今、聖竜の鍵を持てる巫女、御身の加護を求めたり――＞『門よ、開け！！』（アディオン、レイス！！）」

突然、ルシアを象った壁画に真っ直ぐな亀裂が入ったかと思うと、それが左右にゆっくりと開いていった。

「ミュシア、＜ルシアスの鍵＞はあなたに譲ったはずだけれど、まだわたしにも少しは姫巫女としての力が残ってるみたいね。今ここで与えられた、あなたの未来を、最後に告げておくわ」

そう言ってリリアは、真っ暗な地下世界へとミュシアのことを送りだす前に――彼女の耳元へ何かを囁いた。その言葉はのちに確か

に実現するのであったが、悲しみに胸を押し潰されそうなこの時のミュシアにとっては、あまり意味がないように思われる言葉でしかなかった。
　おそらく、そのミュシアの気持ちがリリアにも伝わったのであろう、彼女は微苦笑すると、最後に「元気でね」と、優しくミュシアのことをもう一度抱きしめた。
「わたしがあなたを心から愛していたっていうこと、どうか忘れないで……」
　そしてリリアは、道は時々曲がりくねっていてもほぼ一本道だから、迷うことはないということ、それから地下道は暗いから、光の魔法を使って進むこと、最後に出口近くに日持ちする食糧や地図、衣類やお金の入ったリュックがあるから、それを手にして出かけることを、涙を流して聞くミュシアに説明しなければならなかった。
「そこまで行ったら――さっきわたしが言ったのと同じ呪文を唱えるの。そうしたら、短い時間だけ門は開いて、そのあと自然に閉じるわ。この神聖な祈り場はね、ずっとこんな時が来る瞬間のためだけに存在していたのよ。＜聖竜の鍵＞を代々守る姫巫女が、有事の際に逃げるためだけにね……さあ、お行きなさい。わたしやみんなのことは心配せず、ただ自分のこれからのことだけを考えるのよ。わかったわね？」
　自分もリリアや、他のみんなと一緒にここへ残りたいと主張することは、ミュシアにはもはやできなかった。仮に世界が滅んでも――この鍵さえ残っていたら、希望だけは最後に残されるという言い伝えのある＜ルシアスの鍵＞。それが今自分の体内にある以上、もはや後戻りすることは出来ないということが、ミュシアにはよくわかっていたからだ。
「＜光の精、ラミカよ。我がゆくべき道を照らし給え……＞」
　ミュシアは自分の背後にある扉が閉まる直前、そう呪文を唱えて、小さな光を目の前に灯した。その光はまるで、それ自身が何かの意志を持っているようにゆらゆらと揺れ――地下道の階段を白く浮か

び上がらせていた。
　そしてその道には枝道というものはなく、曲がりくねった一本道ではあったものの、出口へ辿り着くまでの間、ミュシアはこの地下道が永遠に続くものであるかのようにさえ、思われていた。
（リリアさまは何故、ご自分がお逃げにならなかったのだろう。＜聖竜の鍵＞を体内に宿しているのがリリアさまである内になら……わたしに託す前であったなら、そう出来たはずなのに……）
　ミュシアは一寸先も見えぬ暗がりの中で、すでにそうした後悔に苛まれはじめていた。自分だけが助かるための楽な道を選びとったような気がして――本能的に命の危機を察知したことにより、そこから反射的に逃げようとしているのではないかという気がして……胸が苦しくてたまらなかった。
　そして、出口へようやくのことで辿り着き、リリアが言っていたとおりそこに丈夫な布で織り込まれたリュックがあるのを見た時、ハッと気づいた。
（そうか。そうだったんだ……この苦しみが、＜ルシアスの鍵＞を持つ人間が味わわなければならない、宿命ということ。だから、リリアさまはあんなにも……）
　この時になって初めて、ミュシアはリリアの苦しみを理解したような気がした。それなのに、どうしてかつてのようにお優しくしてくださらないのだろうなどと、そんなふうに自分のことしか考えていなかった己のことを、ミュシアはこの時になって初めて恥じた。
（リリアさま、あなたから託されたこの＜聖竜の鍵＞、必ずわたしが守り通すということを、ここにあらためて誓います……）
　扉を開ける呪文を唱える前に、その場にひざまずき、ミュシアは少しの間そこで＜光の女神ルシア＞の加護を祈った。また自分のためだけでなく、リリアや仲間のみんなが守られるように、とも。そして意を決したように顔を上げると、何度か「ここ以外のどこかへ行ってみたい」と夢想していた世界が目の前に開けていることを知り、眩しい太陽の光に目を細めた。

その光は、寝不足のミュシアの目にこの上もなく沁みとおるようだったが、彼女は自分の足を叱りつけるようにして歩き続け、やがて眠気と疲れのために、がっくりと腰を落とした森の中で……そのまま死んだように眠りについたのであった。

第2章　踊る小鹿亭

聖ルシアス王国と国境を接する小さな田舎町、ルドミラでは、大飛空艇団の噂話で持ちきりであった。

なんでも、甲板に竜騎士を乗せた飛空艇が、暗黒竜を自在に操りルシアス王国へ攻め入ったというのである。しかも――その飛空艇の空艇団長を名乗る男が、丘の上のルシア神殿の真上までやって来て、こう叫んだという。

「光の女神ルシアの代弁者であるという<姫巫女>よ！我々の前に姿を見せ、我がものとなるなら、ルシアス王国へ災いが及ぶことはない。ただ、御身ひとつで、数百万もの民草の命が助かることを思い、我が軍門へと大人しく下るがいい！！」

そして、当の姫巫女は神殿の前へ姿を現すなり、こう言って返したということだった。

「血に飢えた穢れし民どもよ、我が前から去っていくがいい。呪われよ、ナーガ・ラージャの民！貴様たちの穢れた手にかかって神の御威光が損なわれるくらいなら――我、今、己が手で自ら命を絶とうぞ！！」

そう叫ぶなり、風に長い金の髪をなびかせた<姫巫女>は、聖なる短剣を手にし、神殿の床を血で染め抜きながら絶命したという。

「なんて、おいたわしい……！！」

旅芸人の男が「自分のこの目で確かに見た」という話を聞くなり、荷車に野菜や干し魚を載せて売り歩いていた女は、ポケットからハンカチを出して涙をぬぐった。

「わしも、今まで長く生きてきたが、こんなひどい話、今まで聞いたこともないわい！」

もう七十か八十かというくらいの、腰の曲がった翁が怒りのあまり杖で地面を打ち叩いている。旅芸人は、自分で話しながら感に入ったとでもいうように、目にうっすらと涙を浮かべて続けた。

「しかも、＜光の女神ルシア＞に仕える巫女の全員が、ナーガ・ラージャの穢れた男どもに捕えられるのを恐れて……姫巫女さまの後を追うように自ら命を絶ったのですよ。恐ろしいことです、本当に。結局、自分の欲しいものが手に入らなかった空艇団の男たちは、聖都で思う存分暗黒竜を暴れさせてから――再びやって来たのと同じ西の空へと消えていったらしいです」

「＜らしい＞というのは、どういうことだ？」

町の広場に出来た人だかりの後ろで、一際背のすらりと高い男が、鋭い声を投げた。

「あんた、その時聖都であったことを実際にその目で見てきたんだろう？それで、正確にはそれは、一体いつのことなんだ？」

「えっとですね、今から三か月前の、第六の月のことですよ。ちょうど、麦刈り祭りのはじまるって日のことでね、俺たち旅芸人は王都の商人たちに招かれてたってわけで……」

背の高い男は、「なるほど」と顎に手をのせて頷くと、彼の話に信憑性を感じとったのだろうか、町の目抜き通りにあるいくつかの商店の前を通り――自分が宿泊している＜踊る小鹿亭＞という旅籠へ戻ろうとした。

今から約三か月ほど前の六月十四日の夜、彼はここから遥かに離れた地、もっと南のロンディーガ王国にいた。そしてその日、北西の方角に流星がいくつも青い尾を引くように、美しく流れていくのを見たのだ。

思わず背筋が粟立つほどの美しい光景に、その方角の指し示すどこかで、何か大事があったのではないかと感じ、馬を急がせてここまでやって来たのである。

（確かに、日付は合うな）

彼――普段はもっぱら、＜蒼の魔導士＞ということで通しているセンルは、容貌のほうは二十七、八にしか見えないが、実際にはすでに三百歳を越えている。いや、今年で二百九十九歳になるのか、それとも三百一歳になるのか、彼自身数えるのをやめてしまってい

るが、とにかくそのくらい長く生きているということである。
　そんな彼にとって、この世というところは、国や土地や時代は変われども、大体のところ「人間」というのはそんなに変わらないものだ……という価値観で落ち着いているのだが、栄光あるルシアス王国の聖都が暗黒竜によって壊滅状態へ追いやられるなど、前代未聞の大惨事としか思えなかった。
（しかも、飛空艇だと？三百年生きてきたこの私でさえ、船というのは海の上に浮かんでいるのしか見たことはないというのに――ナーガ・ラージャの民か。あの砂漠の民に一体、飛空艇などというものを操るだけの才覚があるものだろうか？中央広場にいた旅芸人の言うことは、どうにも怪しいとしか思えんな）
　天の理を知り、地の理を知ることによって魔法の力を操る魔導士であるセンルは、今回の大事件に大きな引っ掛かりのようなものを感じていた。
　ここ、アスタリオン大陸にある聖五王国はすべて、聖都の＜光の女神ルシア＞を祀った神殿前で忠誠を誓い、いかなる方角から中央にあるルシアス王国を攻める者が現われようとも、死力を尽くして守ることを盟約しているのである。
　ゆえに、外敵が西のミッテルレガント王国なり、東のカルディナル王国なり、南のロンディーガ王国なりから攻め上ってきたとしても――常に外敵は他の四王国のどこかで防がれてきた。にも関わらず、この世界の中心、もっとも神聖な聖地とさえ呼べるルシアス王国に、暗黒竜を従えた飛空艇団が現われて壊滅状態にしようとは……。
（面白い）と、センルは思った。もちろん、神殿に仕える美しい乙女たちが自ら命を絶ったということは、彼も悲しいことだと感じはした。だが、三百年も時を生きていると、今感じたような、背筋がゾクゾクするくらいの気持ちには、そう滅多になれぬものなのだ。
（飛空艇と竜の消えた方角が西だというあの旅芸人の話が本当なら、奴らは中海の向こうから来たということか。ミッテルレガント王国

は、五王国中最強の戦士たちを有すると言われているのに……そこ
との交戦は控え、直接ルシアス王国へ攻めこむとはな。そもそも空
飛ぶ船とやらの話が本当なら、それは千年以上も昔に滅んだとかい
う箱舟民族の知恵と何か関係があるのかもしれない。聖都の様子も
直接目にしておきたい気もするが、箱舟民族のことを書き記した書
物を私が読んだ記憶があるのは――カルディナル王国にある図書館
で、だった気がする。さて、どちらを先に優先させたものか……）
「お、お願いします、やめてくださいっ！！」
「へへっ。ちょっとくらいいいだろうがよ。減るもんじゃなし。お
まえの母親が体売ってるってのは、このへんじゃみんな知ってるこ
とだろ。そのうちおまえもその後を継いで、母親みたいに体を売っ
て歩くようになるって、みんな言ってるぜ？」
（下衆が……どこの町にも村にもいる、ゴミかクズといったところ
だな）
そう思い、センルがその目の前を通り過ぎようとした瞬間――小
柄な、青の神官服を着た青年が、その路地裏へと飛びこんでいくの
が見えた。
「そんなことをしてはいけませんっ！！この女性は嫌がってるじゃ
ないですか。あなたも男性なら、もっと紳士らしく求婚すべきです」
「なんだぁ、こいつ？」
革なめし職人の息子は、さも面白いことでも聞いたというように、
げらげらと笑いだした。
「こんな娼婦みたいな女、誰が本気で相手になんかするもんかよ。
ただ俺は、哀れみの気持ちからちょっと慰めてやろーかって言って
るだけ……ぶふっ！！」
突然、鳩尾に銀の錫杖による一撃を喰らい、男は前屈みに倒れこ
んだ。
「口を慎みなさい。今あなたは、『娼婦みたいな』と言いましたが、
娼婦みたいなということは、厳密には娼婦ではないということです。
さあ、この女性に失礼なことを言ってすみませんでしたと、心をこ

めてあやまりなさい」
「い、いいんですっ。わたしのことなら、本当にもう……」
まだ十六、七の、容貌的にあまりパッとしたところのないその娘は、今すぐにでも逃げ去りたいというように、顔を真っ赤にしている。
騒ぎを聞きつけて、町の大通りからも人が何人か集まりだし、「なんだなんだ」と野次馬顔で近づいてきた。
「チッ、覚えとけよ。このクソ神官め！今に思い知らせてやるからな！！」
お決まりの捨てゼリフを最後に投げつけ、革なめし職人の息子は地面に唾を吐き、その場を去っていった。
「家までお送りしなくても、大丈夫ですか？ええと、お名前は……」
「メアリーです。助けてくださって、本当にありがとうございました」
少女が真っ赤になってぺこりと頭を下げると、青い神官服を着た青年は、メアリーと名乗った女性の手をぎゅっと握りしめてこう言った。
「ああした男性には、少しきつめにものを言ってやらないとダメです。あなたはせっかくこんなに美しいのですから、もっと毅然としているべきですよ」
「は、はい……」
（ふう～ん。なるほどねえ）と、センルは、さも面白いものを見た、とでもいうように、神官の青年を眺めやっていた。
メアリーのほうは、照れたように何度も頭を下げてからその場をあとにしていたが、センルは彼になんとなく気を引かれるのを感じて、若い神官の後をつけることにした。何しろ、あの青の神官服の襟章にしろ、手に持っている錫杖にしろ、すべてがルシアス神殿に仕える神官のそれだったからである。
確か、ルシア神殿の巫女たちは一度神殿内に務めるようになると、外の国へ出かけるような機会は二度とないそうだが――男の神官の

ほうは、神に仕える者として世間を知り、見聞を広めるという名目で、諸国行脚の旅へ出ることが許されていると聞いたことがある。
　といっても、センルは一種の物珍しさから彼のことをつけていたわけではない。ルシアス神殿の神官であれば、三か月ほど前のあの日……何があったのかを直にその目で見て知っているかもしれないと思ったのだ。
　そして、彼の行き着いた先が、自分の宿泊先と同じ＜踊る小鹿亭＞であると知るなり、（こいつは好都合だな）と、センルは感じた。酒場と食事処と宿屋を兼ねた＜踊る小鹿亭＞では、宿賃の中に夕食代と朝食代が含まれているのだ。つまり、この神官の青年もここに宿泊するのなら、自分と同じカウンターか、そばのテーブルで食事をすることになるだろう。
　センルはその時にでも、彼に何気なく聖都ルシアスの様子を聞いてみようと、そんなふうに思ったのだった。
「すみません。ここの一晩の宿賃はおいくらですか？」
「ああ、一晩2レーテルだよ」と、人の好さそうな顔の主人が、カウンターの向こうから答えた。「でもあんた、神官さんなんだろ？この宿を出ていく時にうちの商売繁盛を祈願してくれるんなら――まあただってことでもいいさね」
「本当ですか？実はぼく、今所持金が1レーテルとピム銅貨3枚しかなかったんです。助かりました。ありがとうございます」
　何度もペコペコと頭を下げたのち、青年は朗らかな感じのするおかみに連れられて、階段を二階へ上がっていった。
　二階は一階よりも少しだけ作りがよく――センルは5レーテルとられていたのだが、神官というのはどうも職業柄得をする運命にあるらしい。
「なんだい、センルさん。確かに俺はあんたから5レーテルとったよ。だけどさ、それはあんたが羽振りがいいように見える魔導士さんだと思ったからだよ。あの人は苦労しながら諸国を行脚してる神官さん。そこのところが違うってことくらい、あんたもわかってく

れなきゃ」
「ああ、もちろんだとも」
そろそろ中年の坂を越えつつある主人に、センルは微かな笑みとともに返事を返した。
世間がそのように聖職にある人間に甘いのを利用して――神官に化けてただで宿泊しようとすることがあるというのは、実によくある話だった。だが、商売柄、人を見抜く目のある主人は、彼を本物の神官と判断したということなのだろう。
その証拠にというべきか、彼はわざわざ自分の所持金を馬鹿正直に、宿の主人に明かすということまでしていた。この分だと＜踊る小鹿亭＞の主人は、宿賃だけでなく夕食も朝食も、またあの神官の青年が数日滞在するようなら、昼食までもただで振る舞わなくてはならないだろう。
「ところで、何か町で起きた耳新しいニュースはないかね？」
２０枚で１レーテルの価値があるピム銅貨を３枚、カウンターの上に置いてセンルは宿の主人に聞いた。といっても、これは情報料ということではなく、宿の主人――名をセルガという――が今焼いているココットと呼ばれるパンに野菜と肉をつけた物の代金だった。
「まあ、きのうも言ったとおり、今町は例の飛空艇団のことで持ちきりだよ。店にくる連中も全員、そのことばっかり話してるね。あの得体の知れない連中は、次はどこの町へ攻め入る気だろうってね……なんてったって、竜ってのはその気になりゃあ、ただの一匹でうちみたいな小さな町を一晩とかからず滅ぼしちまえるんだから」
「確かにな。でもここからルシアス王国の聖都までいくには、早馬を飛ばしてもかなりかかるだろう？時間が経つと同時、話には尾ひれがつき、正確性が失われていくものだ。実際のところ、人々が噂してる話のうち、どこまでが本当でどこまでがそうでないのか、私には今の時点ですでによくわからんよ」
「センルさんはお偉い魔導士さんだからなあ。俺たち庶民とは、そ

もそも考え方が違うんでしょうよ。だが、ルシア神殿が穢された上、姫巫女さまだけでなく、他の巫女さまも彼女たちに仕える女神官たちもみんな……」セルガはフライパンを握る手を震わせ、そして目頭を服の袖で拭ってから続けた。「ナーガ・ラージャの蛮族どもに穢されることを恐れ、自ら命を絶ったってのは本当のことだ。毎日、我ら平民のためにも心をこめて祈ってくれた清らかな乙女たち。奴らは絶対にあってはならないことをしでかしたんです」

まるで、セルガの心の怒りを受けたかのように、竈の炎がぼおっと燃え上がった。そのせいで、センルの前に差しだされたココットには若干焦げ目がついていた。セルガはどこか決まり悪そうな顔になると、カウンターに皿を置くと同時、1ピム返して寄こした。

「べつに構わんよ。むしろその金はとっておいてくれ。それで、あの神官さんにビールでもおまけしてやるんだな」

もちろん、神官はアルコールの入ったものを一切飲まない。そうと知っていて、あえて冗談を言ったセンルのことが気に入り、セルガは鳥肉を揚げたものをひとつ、皿におまけしてやった。

「そういや、変わったことといえば……今晩、ここで町の男たちだけで集会が持たれることになってるんですよ。まあ、うちの町だけじゃなく、例の事件があって以来――みんないきりたってましてね。飛空艇をどうにか空から引きずり下ろしてナーガ・ラージャの連中を皆殺しにしてやる方法はないかどうかって、話しあってるんですよ。ここはルシアス王国とカルディナル王国の間にある国境の町だから……両方の国の情報が、同じくらい入ってきます。カルディナル王は、もし飛空艇を空から引きずり下ろすなりなんなりして、連中を倒す方法を思いついた知者には、百万デナリオンの報奨を与えるというお触れをだしているそうです。おそらく、北のイツファロ王国でも南のロンディーガでも西のミッテルレガントでも、同様のことが話しあわれているでしょう。まったく、馬鹿ですよ、あいつら。今回のことで聖五王国だけでなく、世界中の国をナーガ・ラージャは敵にまわしたも同然なんですからね」

「……」
センルは、少しの間食事に夢中になっている振りをして、沈黙した。
百万デナリオンといえば、平民が一生贅沢をして暮らしたとしてもお釣りがくるほどの金額である。センルは金に困っているわけでもないし、そんな大金に興味もなかったが、実際のところ飛空艇を天空から引きずり下ろすというのは、理論上難しいことではない。
重力魔法を使えば、そこらの小船を難なく空中へ浮かせることは、センルでも簡単に出来ることだった。また鳥を重力魔法で捕えて地上へ落とすということも、決して難しいことではない。
だが、カルディナル王国は聖五王国中、もっとも魔術の研究に秀でた国なのである。王都には有名な魔法学院があるだけでなく、世界中の知者が集まってくると言われる世界最大の蔵書が眠る図書館まであるのだ。にも関わらず、王がそのような触れを出したということは、カルディナル王国にいる賢者たちでさえも――もしや打つ手がない、ということなのではないだろうか？
「ああ、そういやセンルさんは魔導士さんだから、何かいい案があれば、カルディナル王国の王府へ申し出てはどうですかね」
センルの沈黙を、何か勘違いしたらしいセルガが、そう言った。
「なんだったら、今日の男たちの集まりで、何かいい知恵でも授けてくださると有難いんですけどね。どうせ、俺たち庶民が話しあったところで……結局、最後は酒飲みながらのぐたぐた話に終始するってのは目に見えてるんですが、それでもみんな、心の底にある怒りをそんな形ででも吐きださずにはいられないんですよ」
「ああ、気持ちはわかるよ」
ロンディーガ王国からここへ来るまでの道中、どこの町でも村でも、耳にすることといえば、飛空艇のことか姫巫女の非業の死のことか、暗黒竜のことかのいずれかだった。
今は＜？（ニガル）の刻＞で、センルは少し早めの夕食をとっていたのだが、やがて店を閉めた商家の男や職人たち、麦打ち場から

戻ってきた男たちがここを溜まり場として騒ぎだすだろう。
そういう時、旅の流れ者は絡まれやすいから、センルはさっさと二階へ避難しておこうと思った。だが、センルがそう思った時――二階から、話を聞きたいと思っていた神官の青年が、おかみさんと一緒に下へおりてきたのである。
何か懺悔でも聞いてもらったのだろうか、人のいい顔をした太ったおかみが、エプロンでしきりに目の涙をぬぐっているのが印象的だった。
「一体どうしたんだ、おまえ……？」
気が強く、人前で滅多に泣くことのない女房が泣いているのを見て、セルガは驚いた。
「なんでもないんだよ、あんた。ただ、ちょっとばかり神官さまから有難いお話をお聞きしたっていう、それだけのことさ。さあ、どいとくれ」
マリアはそう言って、その神官さまにお出しするための料理を、腕まくりをして作りはじめた。この時期にこの地方でしか取れないキノコを入れた、マリア特製のスープである。
途端、センルは早めに夕食を終えたことを後悔したが、人のいいおかみが神官の食事のついでに、自分にもそのご馳走を振るまってくれることを期待して、もう暫くの間カウンターに座っていることにした。
神官の青年は、まるで何かを用心するように、センルと三つ席を隔てて椅子に腰掛けている。彼が有翼人身の像を頭に堀りこんだ錫をカウンターに立てかけるのを見、（やれやれ。どこまで世間知らずなんだか）と、センルは若干呆れた。
その銀の錫杖はおそらく、売れば難なく一年以上は遊んで暮らせるくらいの金になるだろう。これから冬に入る少し前くらいになると、このあたりでも夜盗が多く出没する。助けても金にもならぬ町娘に説教をしたり、自分の所持金を宿主に教えたり、まるで盗んでくれと言わんばかりに銀の錫を身近なところへ置いておいたり……

どこをどう旅してきたのかは知らないが、よくもまあ今まで無事だったものだと、センルはある意味感心した。
「旅の神官さん、うちの女房が泣くくらいの一体どんな感動的な話をされたんですかね？」
セルガは、自分でも少し不謹慎だとは思ったが、それでも好奇心から茶化すような口調でそう聞かずにはいられなかった。
「それは、ぼくとマリアさんとの間の秘密です」そう言って、どこか生真面目そうな横顔をした青年は、分厚い聖書から目を上げていた。「まあ、それでも簡単に言うとしたら……聖書に出てくるお話をして、それをマリアさんのお悩みに当てはめたという、そういうことかもしれません」
実はマリアは、家を飛びだして戻ってこない一人息子のことを神官に相談していたのだったが、彼に祈ってもらったことにより、すっと心が楽になっていた。普通の人にただ、「いつか必ず帰ってきますよ」と言われても、気休めにすらならなかったに違いないが……ルークと名のる神官は、自分が孤児であり、ルシアス神殿の前に捨てられていたこと、母のぬくもりというものを自分は知らないが、帰る場所のある息子のマルスがいかに幸福な人間であるかということ、いつかそのことに気づいた時に息子さんはきっと帰ってくるでしょうと、そんな話を心をこめてマリアにしてくれたのだった。
夫のセルガは、「今ごろマルスはどうしてるかしらねえ」とマリアが言っただけでも機嫌が悪くなるのだが、マリアはルシアス神殿が破壊され、孤児であるというだけでなく「本当に帰る場所のなくなった」ルークに対して、胸が熱くなるばかり、涙したのであった。
やがてきのこのスープに、卵やじゃがいも料理を添えたココットなどが出来上がると、神官のルークは真剣に読んでいた聖書を閉じ、食前の祈りをしてから夕食に手をつけはじめていた。
「徳の高い神官殿に、こんなことをお聞きするのは心苦しいが……」
おかみがついでのように、きのこスープを自分の前にも置いてくれたのを見ながら、しかし彼女が怒りだしそうなことを、センルは

あえてルークに聞いた。
「あんたは、ルシアス神殿が破壊された時、一体どこでどうされていたんですか？本来ならば、命に変えても姫巫女さまをお守りすへぎ立場の神官たちは、暗黒竜や飛空艇がやって来た時、ただ指をくわえて空をぼんやり見てたっていうのは本当なんですかね」
「ちょっと、センルさん……っ！！」
流石にセンルのこの言葉には、マリアだけでなくセルガでも顔が青くなった。
ルークは口許まで運ぼうとしていたスプーンを止めると、それをスープ皿の中へ戻してから、俯いたまま、体を震わせている。
「ぼくは、あの時……聖都にいませんでした。神官として、周辺諸国を見てまわるための修行の旅をしている最中だったんです。話を聞いた時は、本当にショックでした。姫巫女さまや亡くなった巫女さまたちの代わりに、この自分が死んでいたらと、今も本当にそう思っています」
部屋の空気がしーんとなり、マリアが再びエプロンで目尻の涙をぬぐっていると、入口の鈴を鳴らしながら、客が何人か入ってきた。カウンターの上に無造作にピム銅貨が何枚も投げだされ、その若者の一団は六つあるテーブル席のひとつを占領した。
「さあ、遠慮せずにお食べになってくださいな。ルークさま」
「はい……すみません」
センルはそれ以上、ルークに何も質問しなかったが、それでも彼の様子をじっと窺い続けてはいた。何故といって、彼が何気なく脇においた聖書――これもまた売れば結構な額になるものであり、酔ったふりをした人間がセルガやマリアの目を盗んでこっそり持っていく……そんなことは実にありえそうなことだったからだ。
（どうやらこの坊さんは、本物らしいな）
そのことがわかるなり、センルはルークに対して強い関心を持った。
彼はもう三百年も生きてきており、どんな人間に出会っても滅多

に心を惹かれることはない。それが容貌の美しい若い娘であれ、国を治める王や女王でさえあっても……彼の心の琴線を少しばかりも奏でることはなかった。

だが、時々本当に極まれに――今自分の目の前にいる神官のように、心の琴線に何かが触れる人間が現われることがあるのである。

センルにとってこの日出会ったふたりの青年というのは、二重の意味で驚きであったかもしれない。滅多に動かない彼の心を揺り動かしたという点でもそうであるし、何よりあとになってみれば＜運命＞としか思えぬふたりの人間と、一日のうちにいっぺんに出会ったという意味でもそうであった。

ただし、もうひとりの青年については、センルは自分の心が「一瞬でも動いた」などとは、随分あとになってもまるで思えないままではあったが……。

ルークがマリアと何か話をしつつ、食事をし終えようかという時、すでに店のテーブルはほとんど埋まり、ヴァイオリンが奏でられ、飲めや歌えの騒ぎになっていた。

最初は確かに、謎の飛空艇団や巫女姫さまの死を悼むような話をするつもりだったのだろう。けれども、それは次第に取るに足らない世間話に姿を変え、全員に酔いがまわった頃には、愉快な笑い声と楽の音が店いっぱいに響いていた。

一応誤解のないように説明するならば、彼らの心には飛空艇団や暗黒竜を憎む気持ち、巫女姫さまの非業の死を嘆く気持ちが深くあった。だが、出来ることならそんな暗いニュースのことは一時的にでも忘れたかったのである。明日、もしその飛空艇団や暗黒竜が自分の町の上空へやって来たとしたら、自分たちの命もまたないだろう……などということは。

その酔った客たちの中には、昼間ルークが諌めた革なめし職人の息子の顔もあった。彼の父親はどうやら町の有力者らしく、三十人以上もいる男たちの輪の中心になって、話をしていることさえあるようだった。

（やれやれ。これだから、下手に人助けなどしないに限るというんだ）

セルガもまた、カウンターを離れ、気心の知れた町の連中とビール片手に談笑するようになっている。

マリアは何か注文が入るたびに、忙しなく立ち働いていたが――内心ではこの仕様もない酔っ払いの集まりにうんざりしているのだろう。カウンターの上にいくらピム銅貨が積まれていっても、ムスッとした顔のままでビールを運んだり、料理の品を作ったりしている。

センルが何より心配していたのは、例の革なめし職人のドラ息子が「覚えておけよ」と言った言葉のとおりに、ルークに絡んで来はしないかということだったが、どうやらその心配はないようだった。

というよりむしろ、彼は下品なだけでなく小心な質らしく、ルークが父親に昼間のことを言ったらどうしようかと怖れているのだろう、カウンターのルークに気づかれないようにとの配慮からか、こちらに背を向けて席に座ったほどだったのである。

だが、とセンルは思う。あんなふうに行く先々で正論ばかりを説いていたら、いずれ必ず彼は痛い目に合うに違いない、と。その時彼が一体どんな顔をし、どんな態度を取るのか……彼の信じる神に対して信仰が揺るぐことはないのか、センルはそのことが知りたいと思った。

そもそも、＜神に対する信仰＞という点で言うならば、ルシア神もルシアス神の威光も、これ以上ないほど地に失墜してしまったのだ。それなのに人々は「あんなものは実はただの偶像だった」と噂するでもなしに、自分たちの神を穢した蛮族に腹を立て、ますます神に対する信仰を増しているようにさえ思えるのが、センルにはまったくもって不思議でならない。

ルークは喧騒と背中合わせの場所にいるというのに、まったくもって驚くべき集中力によって聖なる書に読み耽っている。その様子はまるで、周囲の音を遮断する＜沈黙魔法＞を使ってでもいるかの

ようだったが――彼はあくまでルシアとルシアス神にのみ仕える神官なのだ。ゆえに、信仰の力を源とする魔法以外は学ぶのを禁じられているはずであった。

もちろん、聖書など自分の部屋へ戻って読めばいい話ではあるが、彼の部屋には暖炉がないのでおそらくここにいるのだろう。ルシア神殿とルシアス神殿を再興するための動きはすでにあると聞いているが、彼がそのためにも聖都へ戻るというのなら……一緒についていってみようかと、センルはそう思いはじめていた。

（面白い人間だ、本当に。私はこれまで自由気ままに生きてきて、誰かのあとについていきたいなどと思ったことは、ほとんどないのだがな。何より……）

センルがどこか意味ありげにルークのことを見た時、それまでじっと聖なる書に集中力を傾注していたはずのルークが振り返り、ふたりの目が合った。

それで、センルが何かをルークに話しかけようとし、ルークもまたセンルに何かを言おうとした瞬間――……。

「おーい、宿の主人よ。一晩泊めてくんな！！」

カランカランと、店のドアの鈴が鳴り、大きな一振りの剣を背に差した男が、どかどかと店の中へ入ってきた。

「おう、うちは一泊2レーテルだぜ。今日はひとり、ただで泊めちまってる神官さまがいるもんでよ。それ以上はピム一枚負けられねえな！」

黒い髪に赤い瞳をした青年が、腕組みをしてう～んと唸っている。

「そいつは困ったな。親父よ、俺の財布の中には今、1レーテルとピム銅貨が十枚あるってばかりなんだな、これが。そんで、今後のことを考えて、なんとかピム銅貨のほうは残しておきたい……てことはだ、俺はこの＜踊る小鹿亭＞なんていう心踊る名前の宿に、なんとか一泊1レーテルで泊まりたいってわけだ。どうかな、親父さん。俺、薪割りでもなんでも力仕事ならなんでもこなすぜ。それでひとつ手を打ってみねえか？」

「いかんいかん。そんなんじゃこっちは、商売上がったりだ」
軽く酔っているせいもあるのだろう、いつもは人のいいセルガが、そこだけは譲れんとばかり、しっしっと追い払うような手つきを旅人の青年にした。
「力仕事なら俺さまひとりで十分間に合ってるよ。そうだな、あんた。うちの商売敵のセリーナの宿にでも行ったらどうだい。事によったら、あそこはうちより安く泊まれるぜ」
セルガのこの言葉を受けて、店にいた客の全員がどっと笑った。
何故といってセリーナの宿というのは、町のもっとも貧しい人間の住む地区にある、有り体に言うとするならば、ようするに売春宿だったからだ。
「そこって、本当に1レーテルで泊まれるんだろうな？」
「泊まれるとも、泊まれるとも」と、革なめし職人の親方が請け合った。「むしろ俺も何度か、世話になってるくらいだからな」
男たちの笑い声がますます高くなると、（なるほど、そういうことか）と、センルは妙に合点がいった。昼間ルークが助けたメアリーという少女は、おそらくそのセリーナという売春宿を経営する女の娘なのだろう、と。
センルは、革なめし職人の息子が、ニヤニヤとどこか下卑た顔をしているのを見、（やれやれ。これだからまったく、人間って奴は……）と思った。
普段は人のいいセルガも、酒が入ればこのとおりであり、おかみのマリアはといえば、厄介ごとはごめんだよ、とばかり、ムスッとした顔のまま口を閉ざしている。センルにはこの時、何故マルスという名のひとり息子がここから出ていったのか、その理由がわかるような気さえするほどだった。
「待ってください」
粗末な麻袋に旅の荷物を詰めた青年が、よっこらしょ！とそれを担ぎ直すのを見て――彼の顔の表情は、自分が馬鹿にされたといった意識などないように、笑顔だった――神官のルークがそう声をか

けた。
　小さな声だったにも関わらず、ざわついていた店内が、一瞬静かになる。
「ぼくの元に1レーテルと3ピムあります。この人が持っている1レーテルとぼくのを合わせればちょうど2レーテルになりますから、それでこの人をここへ泊めてあげてください。なんだったら、ぼくと相部屋でも構いませんから……」
（一体どこまでお人好しなんだ、こいつは！！）
　センルはこの時、彼にしては珍しく腹さえ立ってきて、懐から財布を取りだすと、そこからクラウン金貨を一枚、みなの目に見えるようにしてから、カウンターへ置いた。
「これで、このみすぼらしい感じのする男を泊めてやってくれ。ただし、この気高い精神の神官殿とは別の部屋ってのが条件だ」
「お、おう……」
　２０ピムが1レーテル、そして１００レーテルが1クラウン金貨である。ゆえに、平民の間でクラウン金貨が使われることはそう滅多にない。
　ピン、とセンルが投げた金貨が回転し終わるのを待ち、何人かの酔っ払い客がわざわざ金貨を覗き見しに集まってきたほどだ。
「へえ～。俺、クラウン金貨なんて、生まれて初めて見たな」
　何よりびっくりしたのは、黒髪に赤い瞳をした青年のほうで、彼はセンルのほうに近づいていくと、お礼を言いがてら汚い手を差しだした。
「どこのどなたか存じませんが、どうもありがとう。つーか、マジ、助かったぜ！そろそろ野宿するのも流石にキツイ季節だってのもあるし」
「私は貴様のために金を出したわけではない。礼を言うんなら、そちらの徳高き神官殿に対してするんだな」
　男が握手を求めてきてもそれを無視し、センルは腕を組んだままでいた。

ルークは、彼がどうやら何日も風呂にすら入っていない様子なのも構わず、「どういたしまして」と青年の握手を快く受けとめている……センルはますます、なんだかイライラとしてきた。
何故こんな素性もわからぬ、得体の知れぬ男と相部屋になってもいいなどと言うのか。明日には銀の錫杖も聖書も、また金目の物すべてがなくなっているかもしれないというのに……隣人愛は世界を救うという言葉を、この神官は本気で信じているとでも言うのだろうか？
酒場の客たちは、「なんだか白けっちまったな」と言って、どこか苦笑いしながら数人ずつ去っていき――店の柱時計がちょうど、＜？（ルゼル）の刻＞を告げる頃、ルークもまた聖書を閉じて、二階の自分の部屋へ上がっていった。
シンクノアと名乗った青年は、よほど旅の疲れが溜まっていたのだろうか、彼の部屋の目の前を通ると、大きないびきが響いてくるのが聞こえた……（まったく、だから言わんこっちゃない）、そう思いながらセンルは、ルークの後ろからまるで彼を見守るようにして階段を上っていった。
「あの、今日は本当に……ありがとうございました」
センルがかなり無礼な質問をしたのを忘れているのかどうか、ルークはどこか照れたような笑みさえ浮かべて、部屋へ入る前にぺこりと頭を下げている。
「どうか、光の女神ルシアと、光の神ルシアスの祝福とご加護が、あなたとともにありますように。あなたが今日された善行のことは、神の御前に決して錆びない宝として、積み上げられたことでしょう」
――この日の夜、センルは軽いめまいのようなものさえ覚えて、ふらふらしながらベッドの上に倒れこんだ。本当は彼は、あんな酒場のくだらない喧騒につきあうでもなく、さっさと二階の今いる部屋で眠りにつきたかったのだ。
にも関わらず、あの危なっかしい神官のことが心配で、結局銀の錫と聖書の見張り番をするような形になってしまった。

（くそっ！私らしくもない……）
そう思いながらもセンルは、妙に心の中が清々しくもあった。
こんな気持ちになったことはおそらく――少なくともここ数十年なかったことだと、そんなふうに感じる。
（まあ、いいさ。あのルークとかいう神官がいつまでここにいる気なのかはわからぬが、一緒についていって、出来る限り見守ってやるというのも、悪くはないかもしれない）
だが、まさか、その旅の過程にもうひとり、邪魔な存在がくっついてくることになるだなどとは、流石の魔導士センルにも、予想すら出来ないことだったのである。

第3章　湯治町リディマ

センルがルークと出会った翌日、すっかり旅支度を整えたといった感じのルークが、朝食を食べに二階から下りてきた。
その格好を見て、彼がすぐにも出立するつもりなのだろうと思ったセンルは、軽い食事をすぐに終えて、二階へ自分の荷物を取りにいった。
そしてセンルが戻ってきた時――そこには、肩を並べて仲良く食事をする、ぼさぼさ髪の乞食のような男と、身仕舞いをしっかり整えている神官ルークの姿とがあったのだった。
（何故、この私がいちいち、こんなことにまでムカムカせねばならんのだ？）
どこかまだ眠たげなセルガと世間話のようなものをしつつ、センルはルークがさっさとシンクノアとかいう青年から離れて、この宿を後にしまいかと、その瞬間の訪れだけをずっと待っていた。
「ふう～ん。じゃあルークはこれから、温泉町のリディマへ向かうんだ」
パンをシチューに浸してがつがつと食べ、落とし卵もぺろりと平らげたのち、汚いげっぷをひとつしたあとで、シンクノアはそう聞いた。
「ええ。ぼくが向かっているのは、カルディナル王国の王都、カーディルにある王立図書館なんです。なんでもあそこには、世界中の知恵という知恵を収めた本が何千冊もあるそうですから……そこに、ぼくの知りたいことが書いてあるかもしれないと、そう思ったんです」
「ルークはさ、そこで一体どんなことを知りたいわけ？」
ルークのほうはすでに食事を終え、あとはもうこの宿から出ていくばかりという格好なのに、シンクノアが長話をしつこく続けるので、人の好い彼はそれにつきあってやっているのだろう。

（そんな話、さっさと早く打ち切ればいいものを）
そう思いながらさらにイライラして待ち、店の柱時計が＜？（イゼル）の刻＞を打つ頃になってようやく――ルークはカウンターの椅子から立ち上がった。
「ぼくはそろそろ出発しなくてはなりません。シンクノアさん、短い時間でしたが、楽しい話を色々とありがとうございました。あなたの道中がご無事であるよう、今夜必ず眠る前に光の女神ルシアとルシアス神に祈ることをお約束します」
「ああ、べつにそんな、畏まって祈んなくていーからさ。俺をあんたの旅の用心棒にでもしてくんないかな。俺もその……カーディル王立図書館とやらに行ってみたい。例の飛空艇がどーゆー動力で動いてんのかとか、そーゆーことに俺、どうやら興味があるみたいだから」
興味があるとか言いながら、何やら他人ごとのような口ぶりのシンクノアに、センルは不信感を抱いた。そもそも金のない、乞食のような風体の男なのだ。ルークに一緒についていってただで旅籠に泊まったり、何かその種のおこぼれを頂戴するのが目的なのだろう。
そして、彼になんの利用価値もなくなった瞬間、おそらくは何か金目のものを盗んで姿をくらます……そういう腹に違いないと、センルは決めてかかっていた。
「駄目だ」と、センルは重い口調で、ふたりに向かってはっきり言った。「その神官さまの用心棒には、私がなる。貴様など、ここで一晩ただで休めただけでも有難いと思え。第一、おまえのような男がいつも一緒にいたら、彼の評判まで悪くなるとは考えないのか？」
＜赤い瞳を持つ者は、災いの種をもたらす＞という古くからの言い伝えがあり、そんなものは迷信とわかっていながらも、明らかな差別がどの町や村にもあった。センルの知るところ、おそらく数十万人にひとりくらいの割合で赤い瞳を持つ子が生まれるらしいのだが、そうした子は何故かみな病弱で、成人する前に亡くなることが多い。
実際、三百年生きてきて、世界中のあちこちを旅したセンルでさ

え――赤い瞳を持つ人間で、二十歳を越えている若者を見るのは、これが初めてだった。
「そーゆーけどさあ。俺っちもひとりで結構寂しいわけよ。大体さ、赤い瞳を持ってるってことが俺のせいかっつーの。その点ルークは神官だけあって、そのへんのことには理解ありそうだもんな。人のことを外見で雑しないっつーか」
「でも、その……ぼくは自分の身は自分で守れますし、用心棒なんて言われても、ぼくには雇用料なんて支払えませんし……」
ルークがいかにもしどろもどろといった調子で答えると、シンクノアは思わず、飲んでいた水をぶーっと吹きだした。
「あっはっはっ。やっぱり最初に思ったとおり、あんた面白いや。俺はさ、あんたに一晩の恩って奴がある。大体、神官から金ふんだくるような真似、いくら貧乏な俺でもしないっての。こう見えて俺、結構信心深いほうだったりするんだぜ？」
「そう、ですか。でも、その……」
センルの気のせいだったかもしれないが、何故かルークがこの時、自分に助けを求めるようにちらっとこちらを見たような気がした。
「諦めろ、貧乏人。神官殿には神官殿の務めがおありになるのだろうよ。おまえがいると邪魔で最初の目的を達せられないかもしれない。少しは空気ってやつを読んだらどうなんだ？」
「貧乏人に向かって貧乏人って言うなっ！！ちょっとリッチだからって、ムカつく男だな、あんた。でもさ、ルーク。俺がついていくのは駄目で、あいつはいいっていうのは、俺は納得いかないな。光の女神ルシアは、富める者にも貧しき者にも平等に光を注ぐっていう、そういう神じゃなかったっけ？」
「ええと、ですから、その……ぼくはひとりで旅を続けたいというか、なんていうか……」
ルークが再び自分にどこか意味ありげな眼差しを向けるのを見て、センルとしてはなんとなくピンと来るものがあった。これもまた彼の気のせいかもしれないのだが――ルークは少なくとも、自分には

一緒に来て欲しいと思っているのだ。
　それが何故なのかはわからない。だが、とりあえずセンルは彼なりにその空気を読んだのである。
「カーディル王立図書館へは、私はこれまで何度も行ったことがある」
　内心、溜息を着きながら、センルはそう説明した。
「あそこはな、おまえのような野良犬が立ち入りを許可されるような場所じゃないんだ。ルーク殿の場合は、その衣服や髪型や銀の錫杖などが身分を証明してくれ、図書館内への出入りが許可されるだろう。第一貴様、字のほうは読めるのか？」
「しっつれーなっ！！字くらい、俺だって読めるわ！！これでも一応、聖五王国の言語はすべて、それなりに話せたりもするんだぜ？馬鹿にすんなっての！！」
「ほう。もしそれが本当だとしたら、野良犬にしては上出来だな。まあ、ついてきたいのならついて来るがいいさ。私は一応＜蒼の魔導士＞の称号を持つ魔法使いだ。用心棒としては貴様などより、よっぽど役に立つと思うがな」
「なんだ、蒼の魔導士か。白・蒼・赤・緑の４級でいったら、二番目って感じ？エラソーなこと言ってる割に、最上級試験には合格できなかったんだろ？そーなんだ、もしかして図星じゃね！？」
「貴様……っ！！」
　実際には、白・蒼・赤・緑というのは、上から数えて４級ということであり、その下にはさらに５級から１０級のランク分けが一般に存在している。そのうち、白＜ブリンク＞、蒼＜ロダール＞、赤＜マキル＞、緑＜セリク＞の４階級は――平民からして見れば、緑の魔導士の称号を持っているだけでも、超人としか思えぬといった扱いを受けるといっていい。
　白の魔導士は現在、聖五王国にそれぞれひとりずつ、五人しか存在していなかった。つまり、＜ブリンク＞の称号を得た者は必ず、国の魔術院の最高責任者となる任を負わねばならないのである。こ

れがセンルが＜ブリンク＞の称号を持とうと思わなかった一番の理由だった。
「ふ、ふたりともっ！！こんなつまらないことで喧嘩はよしてください。確かにわたしは、ルシア神殿とルシアス神殿を再興するために……そのための鍵となる知識を求めて、カーディル王立図書館へ向かおうと思っています。湯治の町として有名なリディマへ行くと、かなり遠回りになりますが、そこへ行きたいと思ったのは、不治の病いの方が癒しを求めてそこへたくさん来られると聞いたからです。でも、王都カーディルへは、＜エシュタリオン街道＞を馬で行くのが一番早いと思いますし、ぼくはともかくとして、おふたりはそうしたほうが……」
「不治の病いって、ルークはどっか病気なのか？」
「阿呆。ルークが言っているのはようするに、不治の病いを持つ人のために祈りたいってことだろうが！こんなこともいちいち説明しないとわからんとは、本当に鈍い奴だな」
　センルがイライラしてそう言った瞬間、セルガは思わずぷっと吹きだした。
「いや、あんたたち案外、いいパーティになるんじゃないか？ボケと突っこみがなかなか絶妙だし、意外にバランス取れてるっていうか……」
「どこがだっ！！」
「こんな奴と一緒にするな！！」
　シンクノアとセンルの叫ぶのが、ほぼ同時だった。ふたりは一瞬顔を見合わせ、それからまた同時に背けている。
　この時になると、ルークもまたくすくすと笑いだし、彼ら三人は旅装束を整えると、＜踊る小鹿亭＞の前に立ち、ルークはそこで最初にセルガと約束したとおり、この旅籠がこれからも繁盛し続けるようにという祈りを唱えた。
　そして最後に背負い袋の中からユニファという花の枝を取りだし、三匹の小鹿が踊る旅籠の看板の下へ、それを挿し木として埋めた。

「それは、一体なんだ？」
ここでも、シンクノアとセンルがほぼ同時にそう聞いてしまい、互いに顔を見合わせ、また背けている。
「これは、＜待っている人が早く帰ってくるように＞っていうおまじないなんですよ。ルシア信仰には直接関係ないんですが……ルシアス王国の人たちは、ずっと待っている人に無事帰って来て欲しいと思った時に、家の軒下や庭先なんかにユニファの枝を挿しておくんです。どうか、ひとり息子のマルスさんが早く戻ってきますように……」
――果たして、この時のルークの祈りが聞かれたのかどうかはわからないが、セルガとマリアのひとり息子、マルスはこの一年後に戻ってくることになる。
そして、彼がその後＜踊る小鹿亭＞の後を継いだ頃には、ユニファの枝はしっかりと根を張り、毎年花の咲く時期が巡ってくると、その白い可憐な花によって、町の人々の目を楽しませたということだった。

国境の町ルドミラから、カルディナル王国の王都、カーディルまでは、ルークの言っていたとおり、エシュタリオン街道を馬で行くのがもっとも早い。
このエシュタリオン街道というのは、今から七百年以上も昔に、ルシアス王国の時の賢王ディオルシス王が造ったもので、聖五王国の主要な町の目抜き通りは大体、この石畳の道路で貫かれている。そして町ごとに必ず専用の厩舎があり、一頭1レーテルで馬を借りて次の町まで走らせることが出来るのだった。
王都カーディルまでは、この方法で行くのがもっとも最短距離にして時間としても短く済むはずであったが、ルークはあえて面倒な山道を通って湯治町として有名なリディマまで行くという。
そう聞いた時からセンルは、（このことには何か理由があるな）

と感じてはいた。ルーク自身にもし表面上はそうと見えないとしても、何か隠れた病いがあって、それを癒しにいくとか、おそらくそういうことではないに違いない。一応表向きはセンルが自分で口にしたように、そこで病いに苦しむ人々のため祈りたい……といったご立派な理由があったとしても、本当はそうではないのだろうと、センルには漠然とわかっていた。

エシュタリオン街道を行くと、旅の人間はどうしても目立つ。関所や厩舎を管理している役人は、不審な人物には特に目を光らせているし、町の警備の者に連絡して、獄舎に入れる権限まで持っているほどである。

そういう意味で目立ちたくないということは、果たしてどんな理由が考えられるだろうか。一番ありがちなのは、ルークが前科のある罪人で、それを隠すためにこそ神官に化けている、というものであったが――（まあ、その選択肢はないものと見て、まず間違いがない）と、センルは湯治町リディマへやってくる過程で、つくづくそう感じていた。

温泉町リディマは、一番近い村落へ行くにしても、歩いて十日はかかるような僻地に存在している。だが、町自体は小さいにも関わらず、年中あちこちから癒しを求めてやってくる観光客が絶えないので、とても活気があり、経済的にも豊かだというのが見てとれた。

王都カーディルなどからも、時々貴族がやってくるらしく、高貴な方が長期滞在するための特別な宿泊施設まであるのだが、センルたちが泊まることになったのは、ただ清潔なベッドにテーブルがひとつあるだけの、なんの飾り気もない部屋だった。

どうやらここリディマの人間は商魂たくましいらしく、ルークの神官姿を見ても眉ひとつ動かすでもなく、正規の宿賃を請求してきたものだった。

「おお、お偉い神官さまですか～。聖都ルシアスからはるばるやって来たので？それはそれは……そういうことならここでは、いくらでも儲け放題ですよ。お金がなければ是非、先に湯治場で一稼ぎし

てからこちらへ戻ってきてください」
宿泊料のほうは、センルが三人の分をまとめて支払うつもりでいたのだが、ルークはセンルの厄介にばかりなれないと言い張り、宿の主人と値段の交渉をしようとした。
だがこの、小太りでどこか抜け目のない顔をした中年の男は、最初ルークに理解できぬことを言い、さらには彼の肩を抱いて隅のほうへ連れていくと、こんな入れ知恵をしてきたのである。
「湯から上がってきた男性より、女性のほうに特に熱心にお声がけすべきですな。なあに、『病いのために一言お祈りさせてください』といえば……大抵の女性は一度で軽く3レーテルは献金してくれますよ。なんだったらあなた、ルシアス神殿再興のために寄付をお募りになってはいかがですか？そしたらもう、面白いくらいお金ががっぽがっぽ儲かるでしょうな！」
ふっふっふ、と下腹の贅肉を揺らしながら笑う男のことを、ルークはどこか嫌悪に満ちた眼差しで見ていたが、それでもそれ以上何も言いはしなかった。
「親父、これを見ろ！」
シンクノアが、センルから渡されたクラウン金貨をかざした途端、親父の目に金の亡者特有のキラッとした光が輝いた。言うなればそれは、純金に憧れる金メッキのような庶民の眼差しであったかもしれない。
「これ一枚で、一番安い部屋に三人、何泊できる？」
「えっへっへっ。どれ、ひとつお勉強させていただきましょうかね。でもそんなクラウン金貨をお持ちなら、一番安い部屋などといわず、うちの特別室へお泊りになってはいかがですか？」
「特別室っていくら？」
「一泊おひとり25レーテルでございますよ。そこに滅びの谷といわれるレドムから引いてきた特別な湯がございまして、その湯殿を貸し切りにすることが出来るという、なんとも贅沢なお部屋なんですよ、お客さま」

「たっけーな、おい！！もっと他に格下の安い部屋はねーのかよ！」
シンクノアが宿の守銭奴親父と値切り交渉を続ける間、センルはただじっとルークの様子を観察していた。どうせ自分に、「ご迷惑おかけしてすみません」とでも言ってくるのだろうと思って待っていたのだが、その様子はない。
「ぼくは……今日は外で眠ります。ルドミラからここへ来るまでの間だって野宿してきたんだし、そう考えればここは、山や森の中よりまだ暖かくていいと思いますから」
センルは一瞬切れそうになったが、流石に二百八十歳以上も年下の人間に、大人気のないことは出来ないとも思った。
「いいかげんにしてくれ。こちとら、一週間も野宿してきて、久しぶりに今日はベッドの中で眠れるんだ。ぐだぐだ言ってないで、いいから私に金を支払わせろ」
「じゃあ、ここへはシンクノアさんとセンルさんだけで……」
「いいか、二度とは言わん。これ以上私を怒らせるな。あんただけを外の寒空の下で寝かせておいて、私とシンクノアだけがぬくぬくとベッドの中でぐっすり眠れると思うのか？こっちの精神的迷惑ってものもよく考えてくれ」
「……」
ルークは真っ赤な顔をして俯くと、最後に小さな消え入りそうな声で、「すみません」と言った。でも、それなら自分は一番安い部屋で構わないから、シンクノアとセンルは少しいい部屋へ泊まってはどうかと彼は提案したのだった。
そして結局、全員が最格安のなんの変哲もないのっぺりした部屋へ寝泊りすることが決定したという次第なのである。
「センルもさ、ルークと一緒だとなんか金の使い出がないよな。あいつ、聖都ルシアスが陥落したってせいもあるんだろうけど……贅沢するのに慣れてないっていうよりは、贅沢することに罪悪感を感じてるんだと思う。もっとこう俺みたいに、『たからせてください、

センルさま！！』とでも、卑屈に言えりゃあいいんだろうけど」
「おまえのそれは、卑屈とは言わん。どっちかというと、正直な貧乏人ってとこだろう。まあ、なんにしても、我々三人の利害みたいなものが一致してる以上は、貴様もあの生真面目な神官殿も、私に金のことで気兼ねする必要はない。ルークの奴はそれでも、図々しいおまえと違って遠慮を感じるってことなんだろうがな」
一度温泉につかって戻ってくるなり、シンクノアが実は結構見栄えのする男であることに気づき、センルは若干驚いた。さらに言うとすればこの頃には――シンクノアと自分はどうも気が合うらしいと気づいて、センルはそのことにより驚きの念を感じていたかもしれない。
ルドミラの＜踊る小鹿亭＞を出立して七日、山道や森の中を抜けるといった道中で、最初に野宿すると決めた地点へ腰を下ろすと、シンクノアは背中に担いでいる大振りの剣を鞘ごと下ろし、それを見てくれないかとセンルに言った。
そこは森の中の開けた場所で、ルークが木ぎれを集めてくると、センルはそれに魔法で火を点けたのだが、炎を囲って暖をとっているうちに、「そろそろみんな腹を割って話そうや」と、シンクノアが口火を切ったのである。
「もちろん、話したくないことを無理に話せってことじゃなくさ。まあ、最初に言い出したのは俺だから、まずは俺の話をしたいと思うんだけど……センル、あんたこれがなんだかわかるか？」
そう言って大振りの剣を渡され、センルはその剣の鞘を抜こうとしたのだが――どうやっても鞘が抜けなかった。
「魔剣、か。持ち主以外には決して抜けないようになっているというわけだな。ところで、このでかい剣の他にもおまえには腰に差している細身の剣があるだろう？最初に見た時から、その差が気になっていたんだが」
「そーなんさ。その剣、実は俺にも抜けないでやんの」
乾パンをぼりぼりと噛み砕き、干肉をぺろっと平らげながらシン

クノアは笑った。
「俺は北のイツファロ王国の寒村の出身で……生まれた時に目玉が赤かったせいなんだろうな、一年で一番寒いってくらいの、第１３の月に森の中に捨てられてたのを村外れのばーさんに拾われたってわけ。んで、俺が六つか七つの時だったかな。筋骨たくましい流れ者のおっさんが剣技を教えてくれて、そのおっちゃんがこの剣を譲ってくれたまでは良かったんだけど――なんか、わけわかんないこと言うんだよな、そのおっちゃんが。いつか、おまえの上に時がやって来たらこの剣は抜けるだろうとかなんとか……」
「なるほど」
闇のように黒い鞘に包まれた中身を、センルは＜透視魔法＞を使って透過して見た。もっとも、その中身が実際には剣ではなく、剣の形をした「鍵」らしいということは、センルは黙っていたのだが。
「まあ、見た目と違って重量的には結構軽いし、背中に差しとく分には大して邪魔ではないにしても、正直そんな「いつか時がきたら～」なんて言われてもって、普通は思うじゃんなあ？そんで、とりあえず一旦剣のことは置いておくとしても……俺が十六の時にさ、幼馴染みのアイリが突然、例の飛空艇団にさらわれちまったんだ。ほら、俺ってこんな瞳をしてるから、ま、村の子供もろくに相手してくんない感じだったんだけど、唯一アイリだけは俺に優しくしてくれて。俺を育ててくれたばーさんもその時には亡くなってたし、俺はあいつの後を追って飛空艇と竜の痕跡がどっかに残ってないかってずっと探してたってわけ」
「そうか。それでようやくわかったぞ」
＜踊る小鹿亭＞で朝食を食べがてら、何故あんなにもしつこくシンクノアがルークに色々なことを質問していたのかが、センルにもようやく合点がいったのである。
「だが、いくら田舎の寒村でも――聖都ルシアスにやって来たのは、まるで鯨のように馬鹿でかい飛空艇だったというぞ。その飛空艇一艇につき、甲板に一頭のドラゴンを乗せていたということだ。そん

な目立つ乗り物がやって来て、そんな話を今の今まで聞いたことがないというのは不思議な気がするな。おまえが十六の時っていうと、今から一体何年前なんだ？」
「俺が今二十三だから、ま、かれこれ七年前にもなるかな。聖都ルシアスにやって来た時は昼間で目立ったんだろうけど、アイリがさらわれたのは夜のことだった。ちょうど村でお祭りがあって、娘たちはみんな着飾っててさ。俺の住んでた寒村のあたりじゃあ、夏ってのがやたら短くてね。まったく、南のロンディーガあたりへ行った日には、やたら日が長くてびっくりしたもんさ。でも、今も思うよ。イツファロの夏は、短いだけに他のどこの国の夏より美しいってね」
　センルとルークがしーんと黙りこむと、シンクノアは照れたように頭をかいて笑った。
「なんか、柄にもないことしゃべっちまったな。とにかく、俺が旅してるのはそんな理由からってことだ。べつにさ、次に会った時、アイリがもう結婚して子供がいるとか、そんなんでも全然いいんだ。俺はあいつがあのあと一体どうしたのか、今幸せでいるのかどうかってのが気になるっていう、そんだけだ。この七年の間、飛空艇……いや、そもそもあの乗り物が飛空艇っていう名前だっていうことすら、俺はつい最近になるまで知らなかったんだよな。世界中あっちこっち旅して、色んな人間にそのことを聞いたけど、「空に船が浮かぶなんてありえない」とか、まあ大体こっちの頭の具合を疑われて終わりって感じだった。でも、つい三か月前……」
　これ以上のことは、ルークの心の傷に触れることになると思ったのだろう、シンクノアはそれ以上何も言わなかった。センルはルークが何か言うのを待ったが、彼は魔法の炎の光に魅入られでもしたように、そこにじっと見入ったままでいる。
「しかし、おまえが北国イツファロの出身とは、少し驚きだな。シンクノアのその性格は、どう考えても南のロンディーガあたりの陽気さに通じると思っていたんだが。私の勘も、たまには外れること

があるってわけだ」
　そのあと、センルはシンクノアと謎の飛空艇団や暗黒竜のことなどについて、長い時間をかけて色々と話しあった。シンクノアは自分が先に素性を明かしたからといって、センルにもそうした話をするよう促しはしなかったし、ルークがずっと黙ったままでも、会話に参加するよう変に声をかけたりもしない男だった。
　そしてセンルにとって、シンクノアと話していて何より気持ちがいいのは――彼が口で言っていることと、腹の中身が常に一致しているということが、はっきりわかるということだった。そういう意味で、ロンディーガの人間の陽気というよりは世渡り上手な調子の良さとは、彼は性質を別個にしているようだとセンルは思った。
　そう。彼の性格は、言うなればイツファロ王国の白き竜に喩えられる雪を戴いた険しい峰々――その新雪に似ているかもしれないとさえ、センルは思ったものだった。
　そして第一目の野宿では、そんなふうにシンクノアの過去のことや旅の目的のことが話題となり、二日目は、ルークがぽつぽつと自分のことを語りだした。生後間もなくルシアス神殿の前に捨てられていたこと、聖契学院にて、七つの時に本誓願を立てて生涯を神に捧げると誓ったこと、旅に出て暫くして、聖都ルシアスで何が起きたかを異国の地にて知ったということ……話しているうちにだんだん、ルークの声は小さくなっていき、最後は震え声に近いものにさえなっていた。
「なんだか、こんなふうに話していると、ぼくの人生なんて、本当にちっぽけなものですね。本当にぼくは今の今まで、一体何をして生きてきたんだろう……」
「生きてるってだけで、実はそれだけすげえってことなんじゃねえの？」と、シンクノアが慰めるようにルークに言った。「そんなこと言ったら俺なんか、本当に乞食みたいな人生を送ってきたってことになっちまうわな。ずっと放浪の旅を続けて、野宿したりなんだりで、三日もろくなメシにありつけなかったりとかさ。でも、なん

とかかんとか今も生きてる。人間、とにかく生きてさえいれば、最後には結構どうにかなるもんだって、そう思わねえか？」
　シンクノアの言葉は、偉人の格言などとは程遠い素朴なものだったが、そのかわり実体験としての苦労が滲みでており、ルークはその部分に慰められるような気がした。こんな情けない自分でも、生きていていいのだ、という……。
　そしてふたりの人間の過去の告白話を聞かされてしまっては――また、そのことに珍しくも心の動くものがあったセンルとしては、三日目の野宿の夜、果たしてどこまで話せばいいものかと、心迷うものがあった。
　もちろん、自分のことを話すのなど面倒なだけでもあるし、本当は何も話さぬままでいるというのが、センルにとって理想の状態ではあった。だが結局、自分が三百年以上も生きているということを、まず言っておかねばならないだろうと、そう判断したのである。
「ええ～っ！？三百歳！！センルって、そんなおじいちゃんだったの！？」
「そこまで私が想像していたとおりのリアクションをしなくても良かろう」と、センルはシンクノアのことをどこか諌めるような目で見返した。「第一、私はエルフと人間の間に生まれた混血児だからな。百歳になった時、容貌としてはようやく人間の二十歳とか、そのくらいのものだったよ」
「ふう～ん。じゃあ俺とルークなんかは、二百七十いくつとか、そのくらい年の差があるんだ……でもさ、そんなに長く生きてると、結構大変そうだよな。だって、こっちは普通に年をとって老いていくのに、自分は若いまんまなんて、どう考えてもつらいだろ」
「さあな」と、センルは肩を竦めた。「百何十年も昔の、今より若かった頃にはそんなこともあったかもしれん。だが今は……そうしたことについても、どう対処したらいいかわかっているつもりだ。私は人間でもなければ、エルフでもなく、結局どっちつかずの半端者だってことだ。それでも、きのうシンクノアが言っていたとおり、

どうにかこうにか生きているという、そういうことなんだろう」
　それからセンルはシンクノアに、過去にあった冒険談のことなどを聞かれ、昔カルディナル王国の王立魔術院を卒業後、闇の魔法を使う者どもを狩る仕事をしていたことがあると話した。冒険談ということであれば、他にも色々あるのだが、センルは思うところあってそのことを先に話すことにしたのだ。
　のちに、王都カーディルにて、何か面倒なことがあった場合に備えて。
「この世界には、決して使ってはならない禁術を含む、＜闇魔法＞というものが存在する。光の女神ルシアと光の神としてのルシアスが存在するように……闇の世界には、闇の女神アシェラと闇の神アルゴルというのがいて、ようするに彼らに魂を売ることで、力を得るということだな。どこの学校もそうなのかもしれないが、魔術院という場所にも落ちこぼれというのは存在する。まあ、学院に在籍中に闇魔法を使ったとすれば、教師のうちの誰かが気づいてうまく対処するだろう。だがまあ、無事学院を卒業した後に危うくなってそちら側へいくっていう魔導士が、時々いるっていうことだな。実際、闇の力というのは強大なものだから、一度捕えられて誘惑の力に負けると、後はなしくずしに向こうへ引っ張られていってしまうことが多い……それを救うってのは、至難の業だ」
「じゃあ一体、どうするんですか？」
　ルークが自分の体を両手で抱くようにして、そう聞いた。まるで、自分たちを囲む闇の中から今にも得体の知れぬ者が立ち現われるのではないかと、怯えているかのように。
「今にして思えば、ああいう連中を立ち直らせるのは、同じ魔術院にいた優等生ではむしろ逆効果だったということだな。ルークに出会ってみてわかったが、闇魔法に心を売った連中を救うことが出来るのは、もしかしたら光の女神ルシアやルシアス神に仕える聖職者のほうだったのかもしれん。だがまあ、誉れ高きカーディル王立魔術院からそんな人間が出たとあっては国の名誉に傷がつくからな。

そんなわけで、暫くそうした汚れ仕事をしているうちに、私は魔術院の色々な掟に縛られることに息苦しさを感じて……一方的に縁を切ることにした。何分もう、二百年も昔の話になるんでな、私に魔術を教えてくれた先生方もすでに全員亡くなっていようし、破門された生徒が今ごろ戻っても何も問題ないとは思うんだが……学院の中にひとり、執念深い先生がいてな。自分の死後も絶対に王立魔術院に私のことを入れるなと遺言を残していったらしい。その遺言がもし今も効力を発揮するのだとしたら、もしかしたら一悶着あるかもしれないが、まあ図書館で調べものをするくらいは、なんとかなるだろう」

「闇の力と戦うことは、怖くないんですか？」

外の暗闇と、自分の内側の闇が呼応しあったら、その力に負けてしまうことは実に容易い……センルはそのことを重々承知していたが、目の前にいる光の女神と神に仕えているはずの神官が、まさかそのことをよく知っていようとは、少し意外な感じがした。

「まさか、光の女神ルシアとルシアス神に仕える神官殿から、そんな言葉を聞こうとはな。暗闇というのは、実に賢い……いや、ずる賢いというべきかな。人間の心に巣くう欲や恐怖、怯え、その人間が何をもっとも恐れるのかを熟知している。死ぬのが怖いと思っている人間には、長く生きられるよう長寿魔法を教えてやろうと言うし、苦しみから逃れたいと思っている人間には、苦しみからの解放や癒しを与える。困ったことには、ルークが使うような光の魔法によっても人は癒しを得るのだが、闇魔法にもまったく同じ効力を持つものがあるということだな。光の力がもっとも強いところでは、闇もまたその働く力を強くするというわけだ。愚かな人間には、光の魔法が行うことも闇の魔法が行うことも、まったく同じように見えてしまう……結果、どういうことが起こるかね？ルークみたいに毎日祈ることなど馬鹿らしい、手っとり早く欲しいものを与えてくれる闇魔法に頼りたい――そうした誘惑の手が、魔導士と呼ばれる人間には生涯ついてまわるということなのかもしれんな。まあ、こ

んなのは魔術院の初等科で学ぶような、極めて初歩的なことだが」
魔法といったものを一切使えないシンクノアは、ただひたすら感心したといったような顔つきで聞いていたが、この日の夜、センルが気になったのはルークの暗い顔つきだった。
実をいうとこれは、前から薄々感じていたことなのだが、センルはルークが、実は三か月前のエゼルの月、聖都ルシアスにいたのではないかと推測している。そこで彼は本来自分が命に代えても守るべきはずの巫女たちが、血の海の中でひとりひとり死んでいくのを、なすすべもなく見ているしかなかったのではないだろうか……その時にあった惨劇のことを思うと、光の神に対する信仰を捨てたくなるということが、もしかしたら彼にはあるのかもしれなかった。
その日の夜もまた、センルは魔法の炎を中心にして同心円を描くように＜獣除け＞の結界を張った。正確には＜魔物除け＞といったほうが正しかったが、シンクノアとルークには「獣除けの結界」だという説明をしておいたのである。
こうしておけば、寝ずの番など立てずとも、結界付近に何者かが近づけば、自然とセンルは目を覚ますことが出来る。
――そしてこの日の真夜中、不審な気配を感じてセンルは目を覚ました。
星の位置から見て、今は＜？（アゼル）の刻＞と＜？（マゼル）の刻＞の間くらいかとセンルは思ったが、ふと結界の外に実体を持たぬ闇の亡霊たちが、何人も立っていることに気づいたのである。
『＜鍵、欲しい……鍵、おくれ……＞』
『＜クルシイ、クルシイ。お願い、助けて。あれがないと……子供が死んでしまう……＞』
『＜あれ、持っていかなきゃ。罰……恐い、死にたくない……＞』
『＜ちょうだい、ちょうだい。鍵ちょうだい！！かわりに欲しいものいっぱいあげる！！＞』
『＜鍵を寄こせ！！寄こせ寄こせ、寄こせぇぇぇっっ！！！＞』
「はっ、ははははっ！！」

彼らが絶対に侵入できない結界の内側から、センルは哀れな闇の亡霊どもを居丈高に見下ろしてやった。
「そんなに欲しければ、持っていけばいいだろう？こちとら、貴様らのやり口なんぞ百も承知なんだよ。最初は弱々しく見せて懇願し、それが利かぬとなると、脅す、ねだる、逆ギレする……まったく、いつまでたってもワンパターンな連中どもだ。貴様らの主にこう伝えるがいい。鍵は絶対に渡さん、とな。どうしても欲しければ、貴様自身がここまで出向いてくることだ、と」
邪霊を追い払うための魔法をセンルが唱えはじめると、その詠唱が終わらぬうちに、臆病な霊どもは退散していった。
「さて、と」
センルは結界をもう一段強化すると、呑気にいびきをかいて眠っている、シンクノアの傍らにひざまずいた。
そして彼が剣の師匠に託されたという＜魔剣＞をいま一度手にとり――これが＜鍵＞と呼ばれる何かだということを、シンクノアに教えておいたほうがいいだろうかと思案した。
（だが、もし奴らの探しているのが＜これ＞なのだとしたら……よくもこいつは、七年もの間放浪生活を送っていて、無事だったものだな。しかし、七年、か。その頃からすでに飛空艇を操る連中は存在していたのに、何故今この時に奴らは聖都を攻めたのか……わからんことが多すぎる）
センルは暫くそうした考えに耽り、やがて再び短い眠りの中へと誘われていったわけだが――彼のように肝の太い魔導士というのは、聖五王国全土を探してみても、そうはいなかったに違いない。
彼は闇の力を恐れてなどいなかった。かといって、ルークのように光の力に頼っているというわけでもなく、ただセンルは自分の内側にある＜暗闇＞といったものを制し、さらには飼い慣らすまでの力があったということだ。それでも、油断すれば犬に噛まれるくらいの怪我を負うこともあろうし、それがやがては致命傷になるということもありうると、彼は重々承知していたのである。

第４章　滅びの谷レドム

（それにしてもまったく、＜赤き瞳を持つ者は災いを招く＞という言葉が、迷信でもなんでもなく、本当だったとはな）

あの邪霊どもの狙っているのが、シンクノアの魔剣であったとしたら、センルはルークとシンクノアのことを離すべきではないかと考えていた。

幸い、これから向かう王都カーディルは、そういう意味でこの世界の中でもっとも安全な場所だったかもしれない。王都は強い結界で守られ、邪霊一匹入りこめるような隙のないところだったからである。

（まあ、それからのことは、そのあと考える、にしても……）

「ルークの奴は、温泉に入りにいったのか？」

「さあ、どうだか」器用に旅装束を繕いつつ、シンクノアは最後に歯で糸を切っていた。「俺が風呂に入ってた時にはあいつ、いなかったよ。なんかさあ、町の中央広場のあたりにうさんくさい白装束の神官がいてさ。「光の女神ルシアの御威光よ、再び！！」とか言いながら、金をとって癒しの真似ごとしてるみたいなんだ。あれ、絶対詐欺だと思うんだがな～。まあ、中には本当に病気が治ったとかいう人もいるらしいし……」

「ちょっと、行ってくる」

センルはすっくと立ち上がると、魔導士の杖を片手に、部屋から出ていった。

センルとしては、この町へ来てからルークのことにはあえて目を光らせず、少し放っておくことも必要かと思っていたのだが……その似非神官に向かって、相手がぐうの音も出ないような正論をかましてやしないだろうかと、心配になってきたのだ。

（まったく、そんな詐欺神官のことなど適当に放っておいて、おまえはもう少し自分のことだけ考えていればいいんだ）

確かに、宿屋や露店商の並ぶ通りをいくと、道が十字になった真ん中に噴水があり、そこで何か奇声を発しながら「神よ、癒しの力をあらわし給え！！」と、さかんにヒソプの枝を振っている男に、センルは出会った。

その初老の男にオリーブ油を患部に塗られていた女性が、「治った！治ったわ！！」と、突然起きだしている姿が見える。

（ただのサクラなんじゃないのか）と思いつつ、センルはその人だかりの中にルークの姿がないのを見て、少しだけ安心した。

病気を治すために湯治へ来ていた者たちは、似非神官に向かって金を投げ、「自分の病気も治してくれ！」と叫んだりしている。

「まあ、そう急がず、慌てず……順番に並んでください。そう、順番に」

その順番に並んだ連中から、最初にオリーブ油を塗られていた若い女性が、箱を手にして金を集める姿を見て、センルはかなりのところ呆れてしまった。

（やれやれ、こんなものに引っかかるとはな。だがそれだけ、「藁にもすがる思い」っていうのが、この人たちにはあるのかもしれない）

センルは広場のどこにもルークの姿がないのを確認すると、なんとはなし、レドム（滅び）の谷へ足を向けてみることにした。ルークが以前、聖書に書かれているこの場所を直に見たいという気持ちもあって、遠回りしてでもリディマへ行こうと思ったと、そう言っていたことがあるからだ。

創世神話に書かれている話によると、人間は増えるごとに次第に心の中で悪を増大させ、自分の快楽のことしか考えなくなっていったという。特にレドムの町の人々の悪は甚だしく、神の目に余るものがあったので、神はレドムの町を一夜にして滅ぼしてしまったということだった。

センルは以前にも何度かここへやって来たことがあるが、大地が抉られ、周囲より一段低くなった場所に、リディマの町は建設され

ている。もちろん、そのような神が滅ぼしたという不吉な場所に、何故再び人々が集まるようになったのか、不思議に思う人もいるに違いない。

だがここは、今も神の怒りがくすぶっているとでもいうように――温泉がわきいでる地へと変わっていたのだ。その温泉町を中心として、あたりには草一本生えぬ不毛の地が続き、禿山をふたつほど越したところからようやく、緑がまばらに点在する平野へと変わる。

リディマの町を離れ、センルが小高い丘へのぼると、そこから谷を見下ろしているルークの姿があった。彼はどこか所在なげにぼんやりとしており、禿山から漂ってくる硫黄の臭気も気にならぬ様子で、何か考えごとに耽っているようだった。

「どうした。てっきり私はまた、おまえがあの似非神官に喧嘩でも吹っかけてやしないかと、心配になって探しにきたんだがな」

「ああ、あの人のことですか……」

センルがかなりそばに近寄ってはじめて、ルークは彼の存在に気づいたようだった。

「あの人のしていることはあの人のしていることで、きっと正しいことなのでしょうね」

そう言って溜息を着き、錫杖で体を支えるようにして、ルークはその場に座りこんだ。

「ぼくがあの広場を通りかかると……同業者だと間違えたんでしょう。ここは自分の縄張りだから、別のところへ行けと言われました。そのあと通りで、リウマチの女性とすれ違ったんですけど、祈ってくださいと言われて、お金はいただかずに、祈りの言葉を唱えたんです。そしたらそのおばあさんにこう言われてしまいました。あの広場にいる白装束の神官みたいに、もっとうまくやらないと人は集まってこないよって。ぼくは、あの人はおそらく偽の神官だと思うけれど、その点自分は本当にルシアス神殿に仕えていたのだとつい言ってしまいました……自分の面子にこだわるだなんて、とても恥かしいことですよね。でも、そしたら彼女は「そんなことはみんな

わかってる」って言うんです。「でももしかしたら本当に治るかもしれないという、その希望にすがりつきたいだけなんだ」って……ぼく、愕然としてしまいました。本物の神官であるぼくよりも――あの人のほうが、人々の心に希望の光を与えられるんです。センルさん、神を信じるって、一体なんなんでしょう。ぼくはずっと神殿の中にいて育ったから、外の世界というものを知りませんでした。でもこれまで旅をしてきて……本当の信仰心を持っている人など、ほんの一握りだけなのかもしれないと、気づいてしまったんです。でも、ああいう人をこそ、ぼくは助け導いて神さまの元へ――」

不意に、ぎゅっと抱き寄せられ、ルークは驚いた。慌てて体を離そうと思ったが、そのあまりの心地よさに、抗うということが出来なかった。

「まあそう、あまり無理をするな。おまえひとりがいくら頑張ったところで、今日とか明日、急に人々が信仰心に目覚めるなんてことはないもんさ。この世界には＜時＞っていうものがあって、信じるのに時があり、人を愛するのに時があるものだ。それと同じく、生まれるのに時があり、滅びるのにも時がある……ルシアス神殿が何か闇に属する力によって滅ぼされてしまったのは、おまえのせいなんかじゃない。だから、そんなに気を張ってがんばろうとするな。わかったか？」

「……！！」

――ずっと、誰かに言ってほしかった言葉を言われた気がして、ルークは思わずセンルの胸の中に顔をうずめて泣いた。と、同時にずっと心の中で抑えつけていた感情が解放され、気持ちがすとんと楽になるような、全身の力が抜けてしまう感覚に襲われる。

滅びの谷と言われる場所を見下ろしながら、一体いつまでそうしていただろう。ルークはその居心地の良さを手放したくなかったが、それでも意志の力によって、ようやくのことでセンルから体を離した。

「す、すみません。本当にぼく……センルさんに甘えてばっかりで

……」
　それからリディマの町へ戻るまで、ルークとセンルはずっと無言のままでいた。
　変に気まずいということではなく、お互いに黙っていても気持ちが通じあっているのがわかり、それで話すことなど、ふたりの間には必要なかったのだ。
「あっ、おっかえり〜！！例の似非神官のこと、もしかしてぶっ飛ばしてきちゃった？」
　シンクノアが能天気にそう声をかけても、ルークは顔を真っ赤にして、どこか恥かしそうに顔を背けただけだった。
　センルもそのことに気づき、（私としたことが、もしかして逆に失敗したか？）と、少し心配になってくる。それからシンクノアのほうへゆっくりと視線を戻し、（それにしてもこの男はつくづく鈍いよな）と、若干腹が立つほどであった。
「ルークもさあ、温泉に入ってきたら？なんだったら俺、背中流してやろーか？」
「い、いえ。結構です。自分で出来ますから……」
　替えの服を一揃い持って、ルークはそそくさと部屋から出ていった。センルは思わず、人から見られない岩場にある露店風呂のことを教えてやろうかと思ったが――そこまで保護者面するのもどうかと思い、とりあえず黙っておくことにした。
　そもそも、センルとしては三人相部屋などという今の状況自体が、本当は最初からまずかったのだと思っている。だが、シンクノアが「俺たち男同士なんだしさ、別に何も気にすることないっしょ！」などと言って、センルが何か言うより先に、この殺風景な部屋に決めてしまったのである。
（そろそろ、限界かもしれんな）
　そう思い、深い溜息をひとつ吐くと、センルはシンクノアに「話がある」と切り出すことにした。
　そして彼の耳に何事かを少しの間囁きかけていると、次の瞬間―

――……。
「ええ～っ！？ルークが、お、お、おん……！！」
ええ～っ！？の部分は、声がどでかいままだったが、それでもセンルがシンクノアの口を塞いだことにより、重要な部分についてはぼかすことが出来て良かったと、センルはそう思った。
「ま、まじっスか。俺、なんかやっばいな～。森の中で一回あいつに立ちションしてるとこ見られてるし。その時も確か、「そんな気にすんなよ！」みたいに、暑苦しい態度で肩とか叩いてたかも。でもなんで、女なのに男の振りなんて……」
シンクノアは耳まで赤くなると、相手が男だと思ってこれまで何気なくしてきた色々なことが気になりはじめたのだろう。ベッドの上に突っ伏すと、「やっべえ！！」と一言叫んで、枕に顔を埋めたまま、暫く微動だにしなかった。
「つまり、私が柄にもなく何故用心棒なんぞ引き受けたかというと、第一の理由はそこにあったわけだ。貴様みたいなどこの誰とも素性の知れぬ男と一緒にいたら、どこで何がどうなるやらわからんと思ったんでな」
「えっ！？そーいや、センルって一体いつからルークが女だって気づいてたわけ？」
ようやく立ち直ったという感じで、シンクノアはむっくりと起きだしたが、その腕にはまだ枕を抱えたままであった。
「最初に会った時からだ。あいつが、ルドミラで革なめし職人の息子に絡まれてる少女を助けるのを見て……下手をしたら女であることがばれるかもしれないのに、何故ああいう余計なことをするのかと思ってな。それから次に、何故男の神官の振りをしているのかと思った。男装するにしても、もう少し別の方法がありそうなものだろう？それで、可能性として一番高いのは――彼女がたぶんルシア神殿の女神官の生き残りじゃないかということだった。細かい事情や経緯についてはわからん。ただ、ずっと見ていて、ルーク……これもたぶん、偽名なんだろうがな。あいつが、何かひどく苦しんで、

怖れているらしいということだけはわかった。それから、あの大惨事の中、自分だけが生き残ってしまったことで、今も悩みの淵にいるんだろうとも思った。つまり、私が何を言いたいかといえば、だ。これ以上ルークに余計な心の負担はかけられないってことさ。女だとばれないようにするだけでも、実際これまで相当なストレスを感じていたはずだからな。その点を、これから私とおまえが……」
「ふ～ん。女の子かあ……そうなんだ。そっか、そっか。イッヒッヒッ！！」
シンクノアが不気味な笑いを洩らすのを見て、センルは少し心配になってきた。こいつだけはそういうタイプじゃないと思っていたのだが、シンクノアの微妙に緩んだ口許を見ているうち、センルは「まさか、おまえ……」と疑いの言葉を差し挟んだ。
「あ～、違う、違う。俺が笑ってんのはそゆんじゃないの！！でも、そっか、そっか～。イッヒッヒッ！！」
「だからその、イッヒッヒッってのは一体なんなんだ」
＜知識＞という点においてだけは、年の功ということもあり、いつも誰に対しても若干上から目線のセンルであったが、シンクノアがこの時とばかり自分に仕返しているらしいということが、センルにはよくわかっていた。
「ま、センルはさ～。今俺のこと、ルークがいつまでも女だと気づかない鈍い馬鹿みたいにしか思ってないだろうけど……俺は俺で、気づいちゃってることがあるんだよね～。そっか、そっか。これでようやく俺にも謎が解けたよ」
ひとり腕を組み、やたらうんうん頷いているシンクノアのことが、センルには解せなかった。この能天気男に気づいたことがあって、奴より賢い自分にわからぬなどということが、果たしてあるものだろうか？
「なんだ？もったいぶってないで、さっさと教えろ」
「でもな～、これは俺ひとりの問題じゃないからさ～。へへへのへ」
シンクノアがなおも焦らそうとしていると、切れかかったセンル

が、「いいから、さっさと言え！！」と、シンクノアに対して凄んだ。
「だからさ、ルークって時々、すごく意味深な目であんたのこと見てるんだよ。神官ってようするに男ばっかの世界だろ？だから、色んなこと知ってて経験してるセンルのことを、最初は憧れのおにーさんみたいに思って見てるのかと思ったわけ。年だってまだ、えっと十八っていったっけ？」
「いや、たぶんもっと下だろう。ルシアス神殿の神官が諸国行脚の旅に出られるのは、十八歳以上という決まりがあったはずだ。だから、それに合わせて十八歳ということにしてるんだろう」
「そっか。まあ、確かに童顔だとは思ってたけどさ。けど、苦しいよな～。自分の好きな相手が自分のことを男だと思ってるなんてさ。センル、あんたさ、あの子の気持ちに応えてやれないんなら、これからはもうあんまり優しくすんなよ。その分俺がフォローしてやるからさ」
「気持ち悪いことを言うな。大体、私は三百……いや、もう数えるのもやめてしまったが、私があの子のことを守ってやるのは、父親が娘を守るとか、とにかくそれに近い感情によってということだ。人を変態みたいに言うのはよせ」
シンクノアはセンルが真剣な顔をしているだけに、彼の物言いがおかしくて仕方なかった。
「そういやさ、なんでルークが男じゃなくて女だって気づいたんだ？＜踊る小鹿亭＞のおかみも親父も、他の客なんかもみんな、絶対わかってなかったと思うぜ。それなのに、なんで……」
シンクノアの問いに対して、センルは暫くの間黙っていた。けれども、あまりにしつこく「なんで、なんで？」とシンクノアが聞いてくるのに根負けし、結局最後は白状することになってしまった。
「匂いだ。私の中にはエルフの血が半分混ざっているからな。人間だけじゃなく、たとえば自然なものの中に何か不自然なものが混じっていたりする場合にも、大抵直感ですぐわかる……まあ、そうい

うことだな」
「えっ！？自分で変態じゃないとか言っといて、やっぱ変態なんじゃねーの！？よりによって匂いだって。うっわ～。俺、もっと高尚な答えを期待してたのに……」
「うるさいっ！！」と、センルは一喝した。「とにかく、あいつが女だってことがわかってるってことは、王都カーディルに到着するまでは黙っておけ。あそこまで辿り着くことさえ出来れば……たぶん他のことはどうにでもなるだろうからな」
――このあともセンルは、シンクノアからからかわれ続けたが、彼自身、こんなふうに人間と何か＜対等＞に話をするのは、それこそ何十年……いや、百何十年ぶりといっていいことかもしれなかった。

（どうしよう、どうしよう、どうしようっ……！！）
ルーク……いや、ミュシアは、心臓がまるで爆発しそうなくらい高鳴っているのを感じていた。腹部に厚手の胴巻きを三重にして巻いているので、センルに抱きしめられた時も女であるということは、ばれていないだろうと思ってはいた。
けれど、問題はどちらかというとそういうことではなく、生まれて初めて異性に抱きしめられたことにより、彼女がこれまで他の誰にも感じたことのない感情を知ってしまったという、そういうことかもしれなかった。
国境の町ルドミラにある＜踊る小鹿亭＞で初めて出会った時――ミュシアは最初、彼のことを直視できなかった。深い藍染めの衣服に黒絹の腰帯を締めているというだけでも、センルはおそらく十分目立っただろうが、もし仮に蒼の魔導士であることを示すヒヤシンス石の杖がなかったとしても……誰もが一目見るだに、彼に魅了されてしまうに違いないとミュシアは思った。
金とも銀ともつかない金銀の髪に、雪花石膏のように白い肌。瞳

の色は彼が持っている杖と同じヒヤシンスブルーで、背もすらりと高いセンルは、ミュシアがこれまで見たことのある誰よりも美しかった。

ルシア神殿に仕える巫女はみな、神はもしや容姿で自分に仕える者を選んでいるのではあるまいか……と、疑いたくなるほどの美女が多かったけれど、センルが持っている肌から滲みでるような気品と優雅さには、ミュシアはこれまで出会ったことがないかもしれなかった。

その後、センルが野宿をはじめて三日目の夜に、自分がエルフと人間のハーフだと教えてくれた時は、ミュシアはむしろほっとしたものだった。彼がハーフエルフという滅多にいない特別な存在であることを思えば、ついセンルのほうを見てぼんやりしてしまったとしても――そんな自分を恥じるでもなく、許せるような気がしたからだ。

けれど、自分が今センルに抱いている気持ちが、恋であるとはミュシアはまるで考えもしなかった。これまでの彼女の人生で、まわりに恋をしている人間など誰もいなかったし、恋愛というのは海を隔てた遠い異国の物語か何かであるようにしか、知ってはいなかったのである。

リリアに見送られ、ルシア神殿を後にしたのち、国境の町ルドミラへ辿り着くまでの旅路は、ミュシアにとってつらく過酷なものだった。本殿で寝ずの番をして香を焚く任に当たっていたため、ミュシアはあの前日一睡もしていなかったし、それだけでなく重い荷を担いでの強行軍にも近いような逃避行だった。

ミュシアには、自分に託されたものを守るためには出来る限り早く聖都から離れる必要があるとわかっていたし、それで方角といったことはまるで構わず、とにかく森の中を走り、山道を駆け抜けるということにしたのだ。

そうしてある程度行った時、突然めまいのようなものを覚えて足許がおぼつかなくなったのを覚えている。彼女は全然眠くなどない

と思っていたし、緊張で張りつめていたせいだろう、足の痛みもまるで感じなかった。まだ行ける、もう少し歩ける……頭の中ではそう思っていても、体が言うことを聞かなくなるまでミュシアが自分を急き立てた結果として、彼女はどことも知れぬ森の中で失神するということになった。

やがてあたりには暗雲が垂れこめ、ひどい夕立となり――ひどく冷えきった体のまま、ミュシアは重い荷物を抱えて再び立ち上がらなくてはならなかった。

光の魔法を使い、小さな光の精ラミカが守ってくれたとはいえ、もし最初に辿り着いた山小屋に住む老婆がひどい悪人だったとしたら、もしかしたらミュシアは人買いにでも売られていたかもしれない。

だが、体中引っかき傷だらけで、足の爪も割れ血まめの出来ているミュシアのことを、このターナという名の老婆は実に丁重に粗末な家の中へ迎え入れてくれた。

ターナは何も言わなかったが、ミュシアは高価な絹の巫女装束を身に纏っていたし、信心深い彼女としては、光の天使を我が家に招くような気持ちで見ず知らずのミュシアのことを家の中へ招いたのであった。

「ほら、まずは炉辺でぬくまって、体をあっためるがいいよ」

おそらくは薪を節約するためだろう、暖炉には最初小さな火が燃えているきりだったが、年季の入った敷物の上にミュシアが膝を丸めると、老婆は惜しげもなく薪を次から次へと放りこんでいた。

それから暖炉棚の上にある小さな壺を手にとり、白い薬膏をミュシアの手や足にある傷口にすり込みはじめた。「なんてことだろうねえ、こんなに白い肌が、こんなに汚れっちまって」としきりに言う老婆を見て、ミュシアは目に涙が滲むのを感じた。

リリア付きの巫女見習いだった時、ミュシアは彼女の背中に出来た湿疹に、同じように薬膏を塗ったことがあったけれど、彼女の元の肌が雪のように白いだけに……その湿疹の赤さが妙に痛々しく思

えたものだった。
　幸い、その発疹は一時的なもので、すぐに消えてなくなったが、リリアは薬よりもミュシアのお祈りのほうが良く効いたのだろうと言って、笑っていたものだ。
（リリアさま……）
　ミュシアが彼女の優しい横顔のことを思い浮かべ、静かにすすり泣きはじめると、ターナが狼狽してこう聞いた。
「そんなに痛かったかね？もしそうなら、悪いことしたね」
　ミュシアは老婆に対して、そうではないということを示すために、しきりに首を振った。ミュシアはずっとルシア神殿で育ってきて、その四方がそれぞれ約四千四百メートルある神殿の敷地内から、外へ出たということがない。
　だから、平民や農民の暮らしといったものがどういうものかまるで知らなかったし、彼らと直接口を聞くのも、実はこれが初めてだった。
　ミュシアはたったの一間しかない、粗末な木造屋を見回し、実際こんなところに人が住んでいるのだとは、信じられないと思ったほどだ。室内は比較的小綺麗ではあったが、総大理石の神殿しか知らないミュシアにはひどく汚れて見えたし、老婆が親切心から出してくれたお茶と食事も、「一体これはなんだろう」と一瞬思ったほど、口慣れないものだった。
　干肉でだしをとったスープの中に、雑穀と薬草のようなものが入っていたが、ルシア神殿に住む巫女たちやそこに仕える女神官たちは、毎年神殿へ捧げられる最上のものしか食べることはない。つまり、国民が王に捧げる税の他に、成人した者ひとりにつき、必ず最上の小麦や果物、オリーブ油といったものを捧げるよう、細かい規定が法律によって定められているのだ。
　そうして国民が捧げたものを下仕えの女官たちが調理し、銀の器に盛って巫女たちの集まる食卓へ上げるのである。また、食材だけでなく絹や染料や革など、神殿税として国民が負担せねばならない

物は実に多岐に渡っており、それらの奉納物を＜姫巫女＞がまず光の女神ルシアへ捧げるという国を挙げた大行事が一年に一度ある。その時＜姫巫女＞は聖都の中央広場へ集まった国民たちに神の威光を知らしめるため、天から火を下らせるということになっていた。そしてその火は確かにこれまで毎年、神殿前の広場に設置されたやぐらの上に、必ず燈され続けてきたのである。

ミュシアもあの赤い火が一体天のどこを源としてやって来るのだろうと、小さな頃から不思議でならなかったが、七週続く収穫祭の最後の夜、神殿から空を見上げていると、本殿で祈りを捧げている＜姫巫女＞のいる方角から、赤い尾を引く隕石のようなものが毎年、時を違わずして落ちてくるのであった。

（でももし、わたしたちの口にしていたものが、このおばあさんの苦しい生活の中から生みだされたものなのだとしたら……）

ミュシアはそんなことを、生まれて初めて考えた。何故といって、老婆の着ている衣服は繕ってあるとはいえ、見るからにみすぼらしく、粗末な木のテーブルの上には穴の開いた靴下がのっていた。ターナはミュシアの姿が窓の外に見えるまで、そこで靴下にあいた穴をかがっていたのであった。

「あんたの姿が窓から見えた時はびっくりしたよ。まるで光の精霊さまが現われたのかと思ってね。どんな事情があるかわからないけど、旅人をもてなすと光の女神ルシアさまの御加護があるっていうからね。それで家の中へ入ってもらおうと思ったのさ」

「あ、あの……ありがとうございました。本当に……見ず知らずのわたしに対して、こんなに親切にしてくださって……」

ミュシアはうまく舌が回らなかった。なんにしても、外は相変わらずの土砂降りで、屋根のある場所がこんなにも有難いものだと知ったのは、彼女にとってこれが生まれて初めてのことだったかもしれない。

その日、ミュシアは炉辺の前で、薄布を一枚かけて眠った。そして翌朝起きてみるとターナの姿はどこにもなく、夕方遅くに彼女が

戻ってきたのを見て、ミュシアは驚いた。彼女は籠にほんの少しの麦の穂を入れて帰ってきたのだが、これが朝から夕方まで働いた、ターナの収穫物だと聞いたからである。

「わたしみたいな貧乏人は、小麦を束にする女たちの後ろをついて回って、そこから落ちたものを拾い集める以外にないのさ。うちの地主は意地悪な奴でね……女房も似た性格してるから、腰を曲げて這って回って、ようやくこれだけの収穫物が得られるってところさ。なんにしても、夕飯にしようかね」

ミュシアは、台所に血抜きをされてぶら下がっている鳥を手に持ち、ターナが慣れた手つきで下ごしらえするのを見て、正直かなりぞっとした。けれども、神殿にいた時だって、食事を準備する女官たちが同じようにしたものが――結局は自分の口まで運ばれていたのだと思い、目を逸らさずにその様子をじっと見つめる努力をしたのである。

「あの、明日はわたしも一緒にいって、小麦の収穫を手伝うっていうのは、どうでしょうか」

裸麦や大麦を混ぜて作ったパンや、鳥肉入りのスープを食べながら、ミュシアはおそるおそるそう聞いた。小麦畑を這いずりまわって落穂を拾うだけでいいなら、自分にも出来そうだと思ったからだ。

すると、ターナの顔が明らかに曇ったのを見て、ミュシアは慌てた。

「ほら、おばあさんひとりだったら、あれだけしか取れなくても……わたしが一緒だったら、二倍以上の収穫になると思うし……」

ターナは、あんたはまるでわかっちゃいないというように、何度も首を振っている。

「あんたはどうも世間知らずのお姫さんのようだから、一から説明したほうがいいかもしれないね。もしわたしが明日、あんたと一緒に落穂拾いをしようもんなら、大変なことになるよ。地主の親父かドラ息子にでも手篭めにされるのがいいとこだろう。もっともあたしは、確かにあんたのお陰で得するかもしれないがね。なんでかっ

ていうと、あんたが地主の馬鹿息子とねんごろにでもなってくれたとしたら……あいつは手のひらを返したみたいに、あたしに親切にしだすだろうからね。そしたら麦を束にして収穫してる女たちも、わたしに対してころりと態度を変えるかもしれない。だけどね、わたしはあんたみたいにいたいけな娘を売ってまで、自分がいい思いをしたいとは思わないんだよ」

それから老婆は（老婆、といってもターナの年は六十五だったが）、自分が若い頃に旅芸人の子を宿して結婚せずに子を産んだこと、そのせいで村では肩身の狭い思いをしてきたこと、苦労して育てた娘は遠くの町の煉瓦工に嫁ぎ、以来音沙汰ないことなどをミュシアに説明した。

「だけど、あたしはこれでいいのさ……村の女たちに馬鹿にされながらも、それでもなんとかやっていけるからね。だけど、あんたにも同じ思いをさせるわけにはいかないよ。もし戻れる場所があるんなら、そこの女主人にでも誰でも、床に頭をこすりつけて詫びて、もう一度置いてくださいと頼むことさ。生きててつらいのは何もあんただけじゃない――それは、このあたしの暮らしぶりを見てもわかるだろう？」

驚いたことにターナは、ミュシアがどこか貴族の屋敷にでも仕えるメイドで、銀の錫杖をそこから盗み、それを金に換えてこれから暮らしを立てていこうと思っていると、何かそんなふうに誤解しているらしかった。

「だけど、そんな曲がった金で本当の幸せは買えないんだよ。わかったら、自分の故郷へお戻り。いいかい？」

ミュシアは、ターナの誤解をどう解いたらいいかもわからず、ただ黙ってぼんやり「はい」と頷いていた。本当は、ターナが昼間いない間に、ミュシアはずっしり重い背負い袋の口を開け、何故そんなに荷物が重かったのか、その理由を初めて知った。

聖書が一冊に、何故か男物の神官服が数着、日持ちのする糧食類にクラウン金貨が五十枚、他に宝石類が背負い袋の下のほうにはぎ

っしり詰まっていた。
　ミュシアは生まれてからこの方、手にお金を持って店で「何かを買う」という行為を行ったことがない。けれども、平民たちにはそうしたことが必要だという話は聞いたことがあったし、どこかお店に必要なものがあれば、それを貨幣と交換する慣わしである、ということくらいは知っていた。
（ターナさんにとって、わたしがここにいるっていうことは、厄介の種が増えるっていうことでしかないんだわ……）
　正直なところをいって、ミュシアにはターナが夕食時に言っていたことの中で、意味のよくわからないところがあった。彼女は「手篭め」という言葉の意味を知らなかったし、「ねんごろ」というのがどういうことなのか、はっきりとはわかっていなかった。けれども全体的な話の雰囲気として――村の地主や奥さんやその息子、その下で働く人たちもみな意地悪なので、悪いが自分はあんたを守ってやれない……といった主旨のことは、わかった気がしていた。
　その日の夜、粗末なベッドに眠る老婆が寝息を立てはじめると、ミュシアは自分の背負い袋の中から、クラウン金貨を全部、テーブルの上へ置いておくことにした。宝石類は、これもまた盗品と思われるかもしれないので、これからのことも考え、ミュシアはとっておくことにしたのだが、金貨であれば少しは生活の足しになるだろうと思ったのである。
（ありがとう、親切なおばあさん。あなたがお優しくしてくださったこと、わたしは生涯決して忘れません……）
　それからターナの家を出たあと、その家の軒下で光の女神ルシアの加護を祈り――そうしてミュシアは光の精ラミカの光の元、地図を確かめ、一番近くにある町へと足を向けた。そこで、金の腕輪をだし、旅籠へ一泊したのだが、金目の物を持っていると思われたのだろう、翌日町を出ようとすると何人かの男たちがつけてきた。
　偶然、そこを通りかかった旅の武人に救われたのだが、その男にお礼として真珠の首飾りを渡そうとすると、彼はどこか困惑したよ

うな顔をしてしきりに首を捻っていた。
「お嬢さん、どこへ行く気なのかは知らねえが、あんたはちと目立ちすぎるな。売春宿にでも売られる前に、少しは知恵を働かせねえと……今みたいな偶然は、二度と起きないものと思ったほうがいいぜ」
絡んできた男たちの言った言葉――「売ったらいい金になる」、「その前に俺たちで……」といった科白を思いだし、ミュシアは背筋が粟立つのを感じた。彼らが自分をどうしようと思ったのかはわからない。けれども、何より男たちのその時の顔の表情が、ミュシアにはぞっとするものに思えて仕方なかった。
彼がどうしても首飾りを受けとろうとしないので、せめて祈らせてくださいと言うと、ますますその中年男は変な顔つきになっていた。そしてミュシアが「光の女神、ルシアの御加護がありますように」と祈り終えると、頭の上で指をくるくる回し、花が咲いたように広げてから、彼はその場を去っていったのである。
山道を歩いている途中、今は人の住んでいない廃屋があるのを見つけ、ミュシアはそこで休むことにした。それから今までにあったことを色々と考え、男物の神官服に着替えると、長かった髪を肩のところで切り揃えることにしたのである。
その後も、銀の錫杖を盗まれそうになったり、置き引きにあったりなんだりで、結局最後にミュシアの手元に残ったのは、1レーテルとピム銅貨3枚だけのお金になってしまった。けれどもその時、彼女は最後にセンルという魔導士とシンクノアという名の放浪の剣士に出会ったのである。
リリアが別れ際、『これからきっとあなたは、いい旅の仲間と出会えるわ』と預言したことを、もちろん彼女は覚えていた。けれどもシンクノアが一緒についてくると言った時、ミュシアはそのことをすっかり失念していたのだ。
それよりも、長くともにいれば、いずれ女であることがばれるだろうということのほうが、彼女には心配に思えてならなかった。け

れどもセンルが用心棒になってくれると申し出てくれた時、ミュシアは本能的に「嬉しい」と感じてしまい、その誘惑を自分の手で完全に拒みきるということが、どうしても出来なかったのである。
（でも一度、女であるということがわかってしまったら……あの人もきっとわたしを軽蔑するだろう。出来るなら、ずっとこのまま一緒にいたいけれど、そうなる前に自分から離れたほうが……）
そのことをミュシアはずっと思い悩んでいた。そしてその答えを求めるように、センルのことを時々眺めやっていたのだが、そのことをシンクノアが「恋」だなどと思うとは、この時の彼女にはまるで想像できないことだった。
熱い露天風呂につかり、顔だけ外の冷たい風にさらさせるような格好のまま、ミュシアはもう一度――センルの広い胸に抱きしめられた瞬間のことを思い返してみた。
『ひとりで苦しまなくていい』、そう言われた気がして、ミュシアは本当に嬉しかった。そんなセンルの優しさに対して、これから何かお返しが出来るだろうか……ミュシアがそう考えていた時、不意に後ろの草むらで何かの気配がした。
反射的に湯から上がり、岩陰に隠れようとミュシアが思った時、彼女は林の間から、一匹の美しい雌鹿がこちらを見ている視線と目があった。
ミュシアは裸のまま、暫くの間雌鹿と見つめあっていたが、やがてピィ、と他の鹿が彼女のことを呼び、まるでそれを合図とするように――その雌鹿は林の奥へ葉ずれの音とともに去っていった。
（リリアさま……わたしは一体これから、どうすればいいのでしょうか）
雌鹿のつぶらな瞳には、何故かリリアのことを思い出させる何かがあった。ミュシアはセンルと出会って以来、このまま＜ルシアスの鍵＞のことなど忘れ、ただ彼とずっと一緒にいられたらどんなに幸せだろうと、そんなふうに夢想することが時々ある。
もっとも、ルシア神殿で幸せに暮らした歳月の中、時に「外の世

界はどのようなものかしら？」と夢想していたのと同じく……それもまた、実現してしまったとすれば、今の自分のように何かを犠牲にする暮らしが待っているという、それだけのことではあるのだろう。

けれど、ミュシアはセンルと一緒にいるだけで、今の自分の不安定な生活のことや、聖都ルシアスが陥落する前に起きた惨劇のことを、一時的であるにせよ、忘れることが出来た。そしてそのあとハッと我に返って、こう戒めるのだ。『おまえは、自分の重大な役目のことを忘れたのか』と……。

果たして、カーディル王立図書館に、＜ルシアスの鍵＞のことが詳しくわかる文献があるものだろうか――ミュシアは露天風呂から上がって体を拭き、着替えると、暮れゆく秋の茜空を見上げ、その色の中にかつてのリリアの赤い髪の色を重ね合わせていた。

出来ることなら、わたしがあなたの代わりに死にたかったと、ミュシアはこれまで何度思ったことだろう。そしてその時に自分も他の巫女たちと同じように自ら命を絶っていたほうが、幸せではなかったかとさえ……長い旅路の寂しい夜には、よく思ったものだった。

（でも今はセンルさんと、シンクノアがいる）

そう思うと、ミュシアは胸にあたたかい何かがこみあげてくるのを感じたが、もし彼らが自分を女だと知ったら――騙されていたことに腹立ちを覚え、優しい態度が変わってしまうかもしれないと、今の彼女にはそのことが心配でならなかったのだった。

終章　聖女リリアの伝説

ミュシアを隠し通路の向こう側へ見送ったのち、光の女神ルシアの描かれた壁画が元のとおりになるのを待ってから、リリアはそこに跪いてこう祈った。

『ああ、女神ルシアよ。どうかあなたの光の子であるミュシアをお守りください。その旅の道中を祝福してください。どうかお願いします、彼女のことを世の悪者どもから、守ってやってください……』

それから、腰帯の中に隠しておいた聖水で清めた短剣を取りだし、光の女神ルシアに捧げた。本来であれば、神殿内に刃物を持ちこむことは堅く禁じられている。リリアはその禁を破ってしまったことをまずはルシアに深く詫び、またさらに自ら命を絶ってはならぬとの、聖なる教えのひとつを破ることに対しても、女神ルシアに許しを請うた。

この時のリリアにはもう、何も思い残すようなことはなかった。彼女がずっと気になっていたのは、とにかくミュシアのことだけだった。何故自分がこのような形で死なねばならないのか、どうせなら、自分のことを＜姫巫女＞になどせず、ルルドさまがミュシアを直接そう選んでくださったら良かったのに……ルルドが亡くなる直前に＜ルシアスの鍵＞を継承させた時、自分がこれからどのような形で死ぬことになるかを知らされて以来、リリアは何度も繰り返しそんなことを考えた。

そもそも、わたしじゃなくても、＜姫巫女＞になるのは第一の巫女のレイラでも、第八の巫女のラーナでも良かったではないか……何故他でもないこの自分がと思い、それと同時にもっともつらい任を他の者に押しつけようという己の心の醜さにも気づき、リリアは一体これまで自分は神に何を祈ってきたのかと、絶望的な思いに苛まれた。

けれども、もしかしたらこれこそが＜姫巫女＞に与えられた宿業

のようなものなのかもしれないと、リリアは思いもした。先代のルルドさまもきっと、最初から姫巫女として悟りの境地を開いていたのではなく、おそらく成り立ての頃には今の自分と同じように、色々なことを恐れ惑い、そのひとつひとつを祈り場で祈ることで……順に悩みを解決されていったのではないだろうか？

リリアは自分が己の悩みや苦しみによって目を塞がれ、随分長い間視野狭窄に陥っていたようだと、今さらながらに気づいて、胸に後悔の深い痛みを感じた。ミュシアを行かせてしまった今、自分がどれほど彼女を愛していたかを、思い知らされる思いでいっぱいだった。ミュシアが二年もの間、第四の巫女である自分に巫女見習いとしていかに良く尽くしてくれたか……そのことがまるで走馬灯のように脳裏を巡っては消えていく。

（これほどのつらい別れが待っていると、わたしは最初から預言によって知っていたし、わかってもいたはずなのに、何故この五か月の間、あの子に優しくしてあげられなかったのだろう）

ミュシアが何かいかさまによって第四の巫女になったのではないかと、みなが疑っているらしいということは、リリアにもよくわかっていた。でも自分が早い段階で、たった一言「神意を疑うのは、冒？というものですよ」と言ってさえいれば……ミュシアもあれほど孤立感に悩み、寂しい思いをすることもなかっただろうに。

（今さら、後悔しても遅いわね）

絹の衣の長い袖で、リリアは涙をぬぐった。この聖所から一歩外へ出たが最後、自分は＜姫巫女＞として毅然とした態度を貫き通さねばならない。リリアは、（神よ、どうか弱い我に力をお与えください……！）と最後に祈り、そうして祈り場から震える足を押し出した。

先ほどまで聖所の脇部屋にいたはずの巫女や巫女見習いたちの姿はどこにもなく、それが何故なのかもリリアにはすぐわかった。本殿のファザードへ出ると、そこには見たこともない巨大な飛空艇と、竜の背に乗った仮面を被った騎士の姿が上空にあったからだ。

「光の女神ルシアの聖なる神殿を冒？する蛮族ども！一体ここに何用か！？」
　リリアは飛空艇が空を漕ぐゴォォン、ゴォォン……という風が唸るような音に負けじと、飛空艇の甲板に出ているひとりの男に向かってそう叫んだ。
「そなたが聖竜の姫巫女殿であるとお見受けした！！我が名は＜地の涯ての国＞の王、アシュランス！御身の意志ひとつで、聖都ルシアスの命運が決まると思うが、いかがか！？」
　どこか隼を思わせる蒼い仮面を被った男の声は、神殿から結構な距離があるにも関わらず、風にのって妙に大きくリリアの耳に届いた。いや、彼女にだけでなく、ルシアス神殿のファザードに出ていた大勢の神官たちにも、中央広場に集まっていた国民にも、その声はおそらくはっきり聞こえていたに違いない。
「そのように、仮面を被って正体を隠しているような卑怯者に、＜姫巫女＞であるこの私が、屈服するとでも思うてか！身の程をわきまえるがいい、この不届き者どもめ！！」
　ルシアス神殿の神官たちも、中央広場にある噴水を囲んでいた民たちも、ルシア神殿や飛空艇を見上げるような形で、「そうだ！そうだ！！」と叫びはじめた。途端、暗黒竜の背にのって上空を遊ぶように滑空していた竜騎士のひとりが舞い戻り、中央広場のルシアス像を、竜の鋭い鉤爪によって粉砕した。
　大理石の巨大な彫像が崩れ落ちてきたことで、その下敷きになった神官たちもいたし、竜の翼が送った突風にあおられ、次々に民たちが倒れはじめ――そのことで怪我人が続出した。
「仮面を被る者は、＜姫巫女＞にとってみな卑怯者か！ならば、一度見たら忘れられぬ我が顔、とくと見るがいい！！私が用があるのは、そなたの体内にあるという＜ルシアスの鍵＞のみ……そのために御身を迎えに来た！！」
　アシュランスと名乗った男が、隼の形に似た仮面を剥ぐと、その下からは顔の左半分が焼けただれた、醜い男の形相が現われた。そ

の時には飛空艇とルシア神殿の距離がかなり縮まっていたため、リリアにも彼の顔がよく見てとれたのである。
　思わずリリアは、反射的に小さな叫び声を洩らしそうになったが、慌てて口許を手で覆い、なんとか嫌悪の情を押し殺そうとした。
「これが、光の女神ルシアの加護を受けられぬ、最果ての民の王の顔ぞ、美しき＜姫巫女＞よ！大人しく我らに従うならば、聖都の王民たちにこれ以上、傷ひとつつけぬ！今そちらに部下を向かわせるゆえ、その竜の背に乗られたし！！」
（ああ、光の女神、ルシアよ。今こそ我に力を……！！）
　リリアは、淡い緑の腰帯から聖水で清めた短剣を取りだした。あんな男に、指一本触れられるどころか、これ以上口を聞くのもぞっとすると思った。前もって彼女に与えられていた幻視は、リリアが己が手によって聖なる短剣により絶命するというものであったが――不思議と、実際にその瞬間が訪れてみると、リリアはもはや何も怖くなかった。
　むしろ、先に見た幻視の中ですでに自分は死んでおり、今現実に起きていることのほうが、実は幻視そのものではないかと、そのようにさえ思われるほどだった。
「呪われるがいい！！＜地の涯ての国＞の民、そしてその王アシュランスよ！！」
＜姫巫女＞リリアは最後にそう叫び、聖なる短剣を深々とその白い胸の谷間に突き刺すと、その場に足を折り、くずおれるようにして倒れた。
　神殿の柱の影にいた巫女や女神官たちは「姫巫女さま！！」と叫び、彼女の元へ駆け寄ろうとしたが、それは暗黒竜の影が許さぬことだった。アシュランスの腹心の部下であるファルークは、何物も傷つけぬようにしてうまく本殿のファザード前へ竜を着地させたが、絶世の美女といっていい姫巫女の体を抱え起こすと、自分の王に向かってただ首を振ったのである。
　――このあと、千年も繁栄の続いた聖なる都ルシアスが陥落する

のに、さして時間はかからなかった。自分の体の中にもし＜鍵＞があるのであれば、姫巫女が自ら命を絶つことなどは決してありえない……そのことを重々承知しているアシュランスは、精鋭部隊を引き連れ、ルシア神殿へのりこむと、十二人の巫女たちをしらみつぶしに探しはじめた。

けれども、この時すでにもう、第四の巫女を除いた残りの十人の巫女たちは、姫巫女の後を追うようにして自ら命を絶ったあとだった。ただひとり、死を恐れた第七巫女サフィだけは――有力貴族である父の庇護の元へ逃れようとして王城へ向かっていた。だが、その堅牢な門扉の前で、巫女見習いのリルカとともにアシュランスの部下である竜騎兵に捕えられてしまったのである。

彼女は＜鍵＞のことを尋ねられ、自分はそんなもののことは知らないと泣きじゃくりながら白状し、もしそんなものを姫巫女が譲ったとしたら、第四の巫女であるミュシア以外にはありえないだろうとも喋った。何しろ彼女はリリアが姫巫女になる前から彼女に巫女見習いとして仕えており、最後に本殿でふたりきりで何かを話してもいたのだから、と。

サフィは自分の知っていることは何もかも洗いざらい話したのだが、それでも竜騎兵たちに連れられて、飛空艇へ乗せられることになった。リルカはただの侍女として捕えられることはなかったが、その後数頭の竜により破壊し尽くされることになる聖都の中を、うまく逃げおおせることが出来たのどうか……彼女のその後を知る者はない。

＜この世の涯ての国＞の王、アシュランスがもっとも憎む光の女神ルシアと光の神ルシアスの神殿は巨大な地震がやって来たあとでもあるかのように、土台以外の部分は完全に破壊し尽くされた。王城や女王や他の王侯貴族などはみな無事であったとはいえ――そこは民がこれまでのようには誰も住めぬ、不毛の焦土と化していたといっていい。

聖ルシアス歴１１８９年の第６の月の１４日、世界の中心と謳わ

れた聖なる都ルシアスは、事実上崩壊した。このことを聞いた周辺諸国の王侯貴族も平民も誰もが、耳が鳴り、魂が震えたという。そして次は自分たちの国が攻められるやも知れぬと怯え、また互いに正確な情報を交わしあうために、エシュタリオン街道には早馬の急使が何十度となく行き来した。

そしてその三か月ほどしたのちに……どこの国でも、巫女姫ルシアと蛮族に穢されることを怖れた巫女たちを祀る、あるひとつの歌が悲しみをこめて歌われるようになった。その歌を広めたのは、聖都ルシアスが崩壊する直前までそこに住み、腕のいいヴァイオリン職人として名を知られていた、エリクという名の男であった。

彼は住む場所も家族も家財もすべて失い、さすらいのヴァイオリン弾きとして旅芸人の一団とともに五王国を移動し、心をこめてどこででもその歌をうたい続けたのである。

その歌はやがて、＜聖女リリアの伝説＞とともに地にあまねく広がり、のちには知らぬ者がないほどの有名な歌曲となっていくのであるが――それはまた、後日の話、ということになる。

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6715y/

聖竜の姫巫女

2011年11月24日00時49分発行